

# ふるさと風

第129号 (2017年2月)

風に吹かれて (107)

白井啓治

・ひなたはのんびり お猫の寝言

縁側の陽だまりにお猫お犬を抱いてうつらうつらしていると、如何にも何の心配もない隠居老人という様ではあるが、新聞やネットニュースなどを見ていると、世の中このままで良いのかと思ってしまう。

人類大混迷期にはいったのだろうか、それとも一大転換期にはいったのだろうか。無責任な短絡思考が蔓延し、一人一人が何をやっていいのか考える時間をもたないまま、強大な鳥合の衆と化した社会が右往左往しているように思えてならない。

世の日常に散漫している物事にいちいち文句をつけるつもりはない。かつての群集心理は、今ではネット心理とでも言うべきなのだろうか。ネットが群集心理をつくりだしている。だがよく見ているとネットの群集心理は、自分の存在が隠されていることへの安心からなのか、あまりにも幼稚で思慮のないものが多い。

とはいえこのネットは、動きの鈍くなった年寄りには随分と便利なものである。かつて、何か調べようとするときは弟子たちに指示して国会図書館へ行ってもらっていたのであるが、今は居ながらにして調べることが出来る。部屋の周りに作りつけた本棚に、平積みにしても間に合わなかった本が一台のPCで済んでしまうのだから便利である。

だがこの便利さは、もしかしたら安易さにつながっているのではないかなと、最近思ってみる。検索数の多いものが先行して出てくるので、一つの話をすべてのような錯覚をもたらすようである。不思議なことであるが、本を資料として使う場合は、一冊の本で済ますということはない。本屋で何冊かの本を手を捲っていると、興味深い考察に出会うことがある。必要資料としてはどの本も大差ないのであるが、思わぬ考察に出会うとそれが大きなヒントとなり、新たな膨らみをもった話を書けるのである。

その意味では、まだネット検索での資料探しは物足りなさが残る。答えが分かるだけでは詰らなと思ってしまうのは、まだネットを使いこなせていないのである。アメリカのドラマを見ていて面白いように巧みに検索をして事件の解明をしていく話が多くあるが、小生などは、未だ未だそこまではいかない。ドラマ並みのネット活用ができればおそろしくかなり視野が広がるのだろうかと思っ

てはいるのだが。この数カ月、鈴木健兄より、「落ち穂拾い」の原稿を投稿頂いている。地名の由来などを書いて頂いているのであるが、非常に面白く興味深い。兄の原稿を読みながら、ふと友人の女性が「髪結」は「神結」に通じる…等のネット投稿を見たことを思い出した。煩わしい乱れた髪を束ね結うのが、髪結いなのであるが、いくら煩わしくとも神を束ねて結うというのは…と吹いてしまった。

明治の頃にカレンダー屋が売り上げを伸ばすため六曜を当て嵌め、しかもそれを誰が言い出したか、勝手に現代語解釈をして友を引くなどと笑えない話に似ていて笑ってしまった。

## ふるさと風の会会員募集中!!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400  
兼平 智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

## 『ひ孫誕生』で人類の長旅を実感 菅原茂美

昨年9月「初ひ孫(男児)」が誕生。私らの長女のまた長女が結婚して2年。ついにやってくれた。待望の宝物を得て、「遙かなる旅路」を実感。

さてそのひ孫が、新年に両親と我が家を訪れ、私はしみじみと、ひ孫を抱いた。あやすと満面笑顔。ほぼ100日齢である。8分の1の我が血を引く。あの笑顔で、じいもメロメロ。お屠蘇がうまい。

私はこの「風」の会に加入して、ほぼ9年間、毎月、一回も欠かさず「人とは何か」「人類の今日に至った道のり」などについて、動物学や進化論を軸足に書き続けた。人間の生きざまを、客観的に眺め、批判や展望を書き続けてきた。それらは『遙かなる旅路』として、2012年に上巻、16年に下巻として纏め、刊行した。

人類は、特別の存在でも何でもない。自然の単なる一部に過ぎない。万物の霊長とかよく言うがそんなの、超買い被り……。人類は何万年歴史を積み重ねようが、倫理的に成長したであろうか？ 目先の利益に飛びつき、自然破壊を止めどもなく繰り返す。反省がなければ進歩はない。しかし、いくら絶叫しても、老犬の遠吠えぐらいに受け止められたのか、あまり反応がないのは残念。

(共感) 反対意見ありましたら、TEL 02399-22-4640)

\*

さて、アフリカに発祥した人類は、幾多の困難を乗り越え、「遙かなる旅路」の果て、世界の隅々にまで拡散していった。アジアの極東・この日本列島にまで、人類誕生以来700万年かけて流れ着いての、新たな命の誕生である。そなたは、先祖の想像を超える長旅の果てに生まれた宝物なのだ。

考えてみれば、原人時代の初産は15歳くらいだから、1世代平均20年と仮定すれば、35万世代を重ねてこの子は生まれた。改めてDNAの連続性を認識させられる。直立二足歩行を初めて700万年。想像を絶する厳しさであったろう。樹上生活から地上に降りれば、猛獣の絶好の餌食となる。種の絶滅に通じる感染症や、火山噴火による気象激変など、数知れぬ環境危機を潜り抜け、よくぞ命のバトンを継続してくれたと、改めて感謝する。

\*

さて、今から7万年前、ホモ・サピエンスは、数百人でアフリカを飛び出し、アラビア半島に住み着き、徐々に人口を増やし、世界各地に足を延ばした。元々すべて黒人だったのだが、住み着いた場所により、肌の色は多様に変化した。

北方に移動した者は、紫外線が弱くなったので、アフリカ以来の黒色皮膚から、徐々に、メラニン色素が減少し、わずかに数万年で、白っぽくなり、コーカソイド(白人)となった。

ところが、北方に移動してみると、驚くなかれ、すでに先住民がいた。旧人ネアンデルタール人である。彼らはアフリカで我々ホモ・サピエンスの10万年ぐらい前に、我々と共通の祖先であるホモ・エレクトス(原人)から分離し、早くも脱アフリカを試みた先輩である。即ち我々の兄貴分である。ネアンデルタール人は、我々サピエンスより体格も大脳も大きかった。使用している石器や洞窟壁画も、サピエンスのクロマニヨン人と何ら変わらぬ。しかし後のヨーロッパ白人が、アフリカや南北アメリカを侵略した際、征服者は先住民を「蛮人」として蔑視したように、新人は旧人を見下した。更に新人は旧人と混血し、金髪や青い

目などの遺伝子を受け継いでいる。アフリカを出なかつた群を除いて、全世界の現生人類は、4%ほどのネアンデルタールの遺伝子を引き継いでいる。

戦勝者の奢れる振舞いは、真に酷い。そして、ネアンデルタールは愚かだから滅びていった……と平然と公言。科学者の論評にも、買いかぶりや、うぬぼれがあるから、注意が必要である。

【イギリスの王立学会は、新進の考古学者が、アフリカで新しい化石人骨を発見し、学会報告をすると、人類のような高等生物が、アフリカのよゆうな野蛮な土地で進化するわけがない。人類の進化は少なくともヨーロッパで、特にこのイギリスあたりで進化したに違いない……。として罵倒した。新進学者は日の目を見ずに亡くなった人もいるという。後にそれがミッシングリンク(前後をつなぐ化石)を埋める重要な発見であったりもした。これらは学会の重鎮が、己の権威を若者に脅かされる事を恐れた、いわゆる「いじめ」である。】

科学の世界に、権威者優位などあるべきではないが、現実には血みどろの戦いである。それに宗教が絡んだりすれば、なおさら醜い結末が多数見られた。ダーウインなど、進化論を述べるのは命がけであった。現在の米国では、学校で進化論を教えることを禁じている州がいくつもあるという。そして、教えた教師は、キリスト教原理主義者である父兄により、実際に殺害されたりしているという。過激なのはイスラム教だけではない。

【私は中米のある国で、キリスト教原理主義者の異常生活を見てきた。スペイン語の国で、アメリカ人500人位の集団(勿論英語)が、周囲をバリケードで囲い、学校も協会も発電所も農場も全て独

自の隔離生活。正義と慈愛を教義とするから、特に悪い事はしないが、地動説を信じない。神が全てを作った。イブはアダムの肋骨から生まれた。

ノアの方舟(はこぶね)など当然の話で、パイブルだけがすべてとする原理主義そのもの。祭りなど開放の日に、彼らの彫刻や絵画など土産に買ってきたが、生業(なりわい)は、どうなっている事やら…。他国の中で、独立国を営むみたいで、法的立場はどうなっている事やら不明である。】

話は大分脱線したが、そういうわけで、ネアンデルタール人は、圧倒的な人口多数の後輩サピエンスに混血吸収され、今から3万年ほど前に、滅亡していった。DNA解析なども進み、彼らは、何も知能が低いから滅亡していったわけではないと、最近では認識されるようになってきた。

\*

さてコーカソイドは、そういう道程を歩んだが、ヒマラヤの南周り或いは北周りで東に進んだグループはモンゴロイド(黄色人種)となった。中緯度地帯なので、皮膚の色は赤道との距離により、白に近い薄い褐色から、かなりの濃厚褐色まで、さまざまである。南回りの一部は現在のインドネシアなど島伝いに、ついにオーストラリアにまで到達し、アボリジニとなった。彼らは今から5万年ほど前には、すでに先住民として居住していた。そして更にヒマラヤの南・北回りをして、東進を続けたのが、我ら日本人の祖先である。

更に今から15000年ほど前、シベリアからアラスカへとベーリング海峡を渡ったモンゴロイドは、わずか1000年足らずで南米チリまで足を延ばした。現在のジャガイモ、サツマイモ、トモロコシなど主要な食糧資源に恵まれ、コロンブス以前

には、南北米大陸で9000万人ほどに人口を増やし、マヤやインカ文明など繁栄を極めていった。

\*

そして黒人の起源は、アラビア半島に移住したのち、再びアフリカに逆戻りしたり、最初から、脱アフリカをしなかった人々が現在のネグロイドである。肌が黒色である原因は、人類の先祖も大型類人猿時代、今のチンパンジーと同じく皮膚の色は白かった。しかし人類の祖先は、発展途上で体毛を失うと、熱帯の強烈な紫外線で、DNAが破壊される。それを防ぐために、皮膚細胞にメラニン色素を蓄え、有害紫外線から身を守るように進化した。もし黒色皮膚に進化できなかったなら、今日の人類はありえない。そして緯度の低いオーストラリアを侵略した白人達に、現在皮膚がंगा多いのは、節度を越えた移住は、悲劇をもたらす事をしっかり認識するべきである。

おまけに近代の「偽」文明は、今の今、自分達の便宜のために空調や食品冷房のため、フロンガスやその代替品の不適切管理により、オゾンホールなど、せつせと破壊を進めている。排気ガスや生活水で、大気や水も汚染している。プラスチックごみや繊維くずの海底蓄積は、微生物や小魚などの生存を脅かし、洗剤などは動物の生理を狂わしている。何もかにも偽文明は地球環境を荒し、子孫の生存を脅かしている。そのような偽文明を推し進める大脳を、私は「毒饅頭」と言いたい。

文明の発展速度はもつとスローでよい。そして進化速度は、シーラカンスとまでは言わないが、ゴリラぐらいで丁度よい。毒饅頭の巨大化は、人類の種としての寿命短縮に直結する。現代文明にも多少は環境汚染に対する反省が見られ、近年は

国際的規制も進められ、どうやら無事に新生児が誕生した事は感謝に耐えない。子孫がともに生活できない環境を残したのでは、未来の子孫から、21世紀の愚かな先祖…と怒りを買うであろう。

\*

さて話は変わり、あまりにも「縄張り根性」丸出しで「国益第一」の現代世相を嘆かずにはいられない。米国の大統領選挙で、あまりにも露骨な保護主義・ポピュリズムで大衆を煽動し、あれよあれよ…という間に風雲児が天に登る。ツイッターでの暴言、記者会見での対立。日本など近隣に多くの問題を抱えているのに、さて、どのような嵐が吹き荒れる事やら…。この原稿はトランプ大統領就任1週前に書いているが、大国ならば、世界を思慮深く平和に誘導する義務があるだろう。

私がどのように考える根拠は、人類のルーツを考える時、ほんのわずかの人数で、7万年前アフリカを飛び出したのが現生全人類の元祖であり、全人類はみな兄弟とも言えるからである。生物は遺伝子の多様性を求めるために、「雌雄」による繁殖システムを獲得したのであるが、遺伝子は「ポトルネック効果」(\*1)により、それほど多様性はなくとも繁栄はできるようになった。全人類は、殆ど近親に近い仲間同士。それが独裁政治や、普遍的価値に反する非民主主義が横行するのは、あまりにも知恵がなさ過ぎる。

【\*1「ポトルネック効果」は「遺伝子多様性減少」と訳される。ある生物集団が、急激に個体数を減らした時、群れの多様性が減少し、次世代が均一化する現象。また同じ原理で、個体群から一部が隔離された場合、少数の個体の遺伝子型が子孫に引き継がれ、「創始者効果」となる。

具体例は、ほぼ1500年前、アジアからベールング地峡を経て米大陸に渡ったモンゴロイドは、偶然、血液型のO型が殆どであったために、現在のアメリカンネイティブは、殆どがO型である。なおO型は、冒険心が旺盛(勝負師型)などとよく言われるが、血液型と性格については、統計的に関連性は証明されていない。

人類が今日の大繁栄を迎えた裏には、7.4万年前インドネシアの「トバ山大噴火」という過酷な環境激変が、逆に人類繁栄に大きな効果をもたらす。アフリカを出た数百人の小集団が、アラビア半島付近で、やっと1万人ほどに増えた頃、トバ山噴火により人口は10分の1ほどになり滅亡寸前に陥ったが、やがて天候回復で人口を増やしていく。その際、ボトルネック効果で、遺伝子の多様性が失われたが、好奇心の強さ、道具の改良を推し進める研究心など積極的な前向き姿勢の遺伝子が集中し、以降、人類の世界拡散の原動力となり、文明を開花させた。しかし、良い事だけが集中したのではなく、強い利己主義的性格や、闘争心の強い、いわば本能優先の過激な性格も集中的に多くの人々に強く受け継がれたらしい。その結果が、今日の戦争多発の醜い世の中に発展したという見方も成り立つ。もしおとなしい性格の遺伝子が濃厚だったら、同じ類人猿の中でも、オランウータンやゴリラやボノボのような紳士的な「種」に発展していたかもしれない。しかし脱アフリカ集団には、利己的で、かなり身勝手な性格の遺伝子が結構濃厚に存在していた…とも言われる。そのせいで大型類人猿が進化する過程で、チンパンジーとヒトのみが、仲間同士殺し合いをする、誠に獰猛な種族へと進化していった…と言える。

現生人類は、確かに穏やかな人種も存在はするが、大方は、領土拡張や勢力争いが強く、下剋上や、戦争のなかつた時代を探するのは容易ではない。

もし、ボトルネックで、人口が激減した時、遺伝的多様性の中から、闘争心の強い遺伝子が失われ、穏やかな性格の遺伝子を持ったヒトのみが生き残り、子孫を増やしていたなら、今日のボノボみたいな紳士集団の生物種「人類」が誕生していたかもしれない。どうやら今日の人類の生きざまを見れば、ボトルネックで絞られる時、善良な遺伝子は減少し、ろくでもない遺伝子が大きく幅を利かしたように思われてならない。

それゆえ、この世は、性善説ではなく、性悪説の方が勝っているように私には思われる。実弾の飛び交う本物の戦争、経済戦争、進学競争、出世競争、歪に進展するスポーツなど、人類はあまりにも激し過ぎる争いの渦に巻き込まれている。】

\*

ひこ孫よ！ 健やかで、人を思いやる性格に育ってほしい。おとなしすぎて、フアイトに欠ける極楽とんぼでもしようがないが、トゲトゲした、エリートになど、決してなつては欲しくない。

荷は重いかもしれないが、21世紀の中・後半に生きるそなた達には、大きな宿題が残されている。次の5項目は人類が成熟するためには、どうしても解決しなければならぬ課題である。積極的に参画して、世のため、人のために働いてくれ！

①現在日本の食料自給率は39%。何事かあれば残り6割は黙って死んでくれ！と言う事か。こんな政治はドアホだ。少なくとも80%は確保すべき。16年度日本のコメ生産量は804万ト、可食食品廃棄量632万ト。これは一体何事だ。ドギーバッグ(荷

ち帰り)を活用すべき。天候に左右されない食糧大量生産システムを、早々に確立すべきである。

②健康長寿対策。世界一の長寿国も、桁外れの医療費では国民の負担が多すぎる。早期の遺伝子解析による健康診断で、がんなど先手先手の予防対策・早期治療など確立すべきだ。

③環境保全。現在の文明は、今の今、自分達の生活が快適ならそれでよい。環境が汚染しようが、資源が枯渇しようが知った事じやない。利己主義丸出し。「現在の地球は未来の子孫からのあずかりもの」という叡智は、どこにも見当たらない。

④人口コントロール。狭い所にギュウギュウ多数の人が住むから縄張り根性丸出しで、戦争やテロが絶えない。適正人口維持にもっと知恵を働かすべきである。狼など食糧が少なければ、ペアリングを造らない。即ち子作りを控える。ヒトは食糧があろうがなかるうが、むやみやたらに子造り過剰。

⑤国連軍強化。世界各国の巨大な軍事費は、真に無駄。そもそも各国に軍備は禁止。国境をなくして世界は一つに。どこかにアウトローがいれば、国連の強力な軍隊が出陣して直ちに鎮圧。

これらは大変かもしれないが、乗り越えなければ明かるい未来はない。そなたがわしの歳になる頃は、世の中は大変わり。右も左も、AI(人工知能)のジャングル。2030年には240万人の職場が失われる。AI時代を無事乗り越える。

この世に生まれた喜びを、みんなが平等にエンジョイできるように、積極的に行動しなされ！  
幸せや平和は、黙っていても、誰かが与えてくれるものではない。自分から行動して、しっかりそれを手に握りしめるのだ。

玉里地区 (2)

9、高崎、下玉里地区―御留川制度

「霞ヶ浦四十八津」という霞ヶ浦の周りの漁師たちで作る自治組織のようなものが、江戸時代になる前からあったといえます。

江戸時代の初めに、下玉里村の大地主が自分の有している土地の前に広がる高浜入を水戸藩が占有できる「御留川(おとめがわ)」とする申し入れがなされ、これが認められました。

実は、この下玉里村の対岸は「井関」で、昔は水戸藩領です。したがってこの高浜入りの霞ヶ浦が狭まった地域を川とみなして水戸藩の漁場として占有できることになりました。したがって、この部分の漁業権が漁師にはなく、網元が多く漁師を雇い大網で大量に魚をとる事態になってしまいました。これに反対していた「霞ヶ浦四十八津」の漁師たちは、乱獲を防ぎ、自分たちの子孫にまで霞ヶ浦の豊かな自然をまもるため、会議を毎年行ない、大量の捕獲法を認めず罰則も設けた八カ条を制定し、その掟を守って江戸末期まで漁を続けてきました。

この高浜から霞ヶ浦沿い東に行く道は鹿島鉄道が通っていた道です。船がなく、鉄道がなくなり、お互いを有機的に結びつける強いきずがなくなってきました。石岡の歴史を紐解いていますが、これも昔からの物や文化の流れがあつてこそ成り立っています。是非その流れを断ち切らないように、お互いがお互いの立場や歴史的な流れを知り、お互いの文化を大切にしていって交流が大切だと感じました。

「御留川(おとめがわ)」の場所を確認したくて、高崎・下玉里地区へ行ってみました。

下高崎地区にも昔の河岸問屋の面影を残す建物が残されています。このようなものは記録にとどめておかないとそのうちに近代的なものに変わってしまうでしょう。目の前に霞ヶ浦が広がっています。霞ヶ浦との間に少し空いたところには蓮畑です。霞ヶ浦周辺はレンコンの一大産地です。

通り沿いに西の宮神社(恵比寿神社)という地元の小じんまりした神社があります。ここに「御留川」の説明がありました。西の宮の別称となつていますが東の宮はどこかにあるのかはわかりません。さて、その玉里の愛宕神社の前から霞ヶ浦湖畔まで300mほどですが、ほとんどが蓮(レンコン)の泥水田が広がります。その先に、少しこんもりした茂みが見えます。蓮田に囲まれた神社(稻荷神社)です。地元の守り神なのでしょう。



蓮田の中に残る「稻荷神社」

でも、ここに気になる説明が書かれていました。

この蓮田の広がる地帯に、江戸時代のはじめまで小さな集落があつたようです。それが、「お留川」制度が取り入れられたとき、この領域は水戸藩の独占漁場となりました。その前まで、誰のものでなく、生活していた漁師が突然お留川に組しないと生活できなくなつてしまつたのです。

一部の人はこれで財をなし、村の発展もあつたようですが、この多くの人たちは別な場所に移つてしまつたようです。その後、この神社が残り、残つた地域の人が守つてきたといえます。

10、素鷲神社

最初は霞ヶ浦水運で高浜から続く高崎地区の恵比寿神社が「西の宮」と呼ばれるので、東の宮はここ玉里の素鷲(そが)神社ではないかと思つたのです。しかし、素鷲神社は各地にあり、出島側の「柏崎素鷲神社」や小川や玉造にも比較的大きな素鷲神社があり、祇園祭りも盛んだと聞いています。何となく気になつて玉里にある素鷲神社に行ってみました。しかし、看板も何もありません。通りに沿つたところにお堂が立っているだけです。お堂の中を覗いてみました。昔お祭りに使われたかもしれない小さな神輿が一つ保管されておりました。この素鷲神社のお堂の後ろ側に少し離れて、もう一つお堂らしき小屋があります。近づいてよく見ると、消えかかつたような字で「昭和三十六年二月二十日 岩谷観世音修繕寄付者名」とあり、名前が連名で書き込まれていました。今でもちゃんと神社として残っているとばかり思つたのですが、どうやらこれが歴史なのかもしれないね。この素鷲神社は街中にある大宮神社に合祀され、今ではここには神社としては祀られていないよう

です。

## 11、大宮神社

旧玉里町役場（現小美玉市役場支所）の通りをはさんで目の前に樹叢がある。そこが「大宮神社」です。

和銅年間（708～715）の創建といわれている。祭神は鹿島神宮の神である武甕槌命で、昔は鹿島明神と行っていたらしい。それが元禄9年（1696）に徳川光圀が巡視の時に大宮大明神と改めたという。そして明治になって「大宮神社」と改めたそうです。立派な拝殿です。貞享元年（1684）の造営と言われています。境内社が6つあるようです。その中の一つに前項で紹介した「素鷲（そが）神社」があります。ここには茨城県指定の文化財「鰐口」（1257年の製造）があります。

## 12、円妙寺

円妙寺は「取手館」（田木谷巻）という昔の大掾氏が「砦」を築いたとされる場所のすぐ近くにある。きつと昔は交通の要の位置にあったものと思われる。この近くの常陸府中（右圖）とこの場所を結ぶ道路を「円妙寺街道」と呼んだという。

何故この寺を知ったのかと言うと天台宗で常行三昧堂（常行堂）に阿弥陀如来の守護神として祀られているという秘仏「摩多羅神（またらじん）」を調べていたところ、この身近な所にあるようだとかあったのである。秘仏ということで公開されることはほとんどないが、いくつかの写真や絵があるのでその像の姿は想像がつくが、関東より北の方では平泉の毛越寺くらいしか知られていない。

常行三昧堂はそれでもいくつか有名なところがあり、行方市の西蓮寺は9月24日～30日まで毎

日常行三昧会（さんまいえ）が行われる。

しかし、この西蓮寺には阿弥陀如来の後ろに摩多羅神がいると言うことは聞いたことがない。

しかし、この円妙寺には置かれているようにあてはまる。しかし、まったく摩多羅神の姿は知ることができないし、ほとんど紹介されたものがない。

数年前、島根県の清水寺の摩多羅神像（木造）が公開された。この円妙寺は至徳3年（1386年）近江園園城寺（三井寺）の乗憲法師が開基したと伝えられ、この阿弥陀如来座像の方が古いのである。

昔はこの寺もかなりの力を持っていたものと考えられる。このような立派な建物が存在するとは思ってもみなかったので驚きであった。

## 13、取手山館

国道355号線が旧玉里村と旧小川町の境界の場所ので小川の街中を通って鉾田に行く道と、最近できた茨城空港方面に行く分かれ道がある。バス停は「田木谷（たぎや）」である。

この場所です新しい道路の工事が行われ、工事前遺跡の調査が行われた。その時にここにあった砦の様子が判明した。この場所には常陸府中（現石岡市）の関東の平氏の棟梁「大掾（だいじょう）氏」と小川城の園部氏との最後の争いの主戦場になった場所のようだ。発掘結果が公開された時の資料を入手した。それによると、

天文6年（1537年）、現在の石岡市に本拠地を持つ大掾氏が小川を本拠とする園部氏に対抗するために築城しました。

天文16年（1588年）、江戸・佐竹軍との戦いで、戦死者を数多く出す激戦の末落城したとされています。と説明がされ、この場所から縄文時代・

古墳時代の竪穴住居跡や、奈良平安時代の遺物も多数発見されています。

またこの取手山館時代のものと思われる多数の鉄砲の弾が発見されました。特徴的なのはトンネルの跡が多数発掘されており、この館にはいる時はこのトンネルを使ったのではないかと言うことでした。まさに自然の地形を利用した砦だったと思われれます。当然「取手山」の名前も「砦山」からきたものでしょう。この場所の左手（東側）の「取手稲荷神社」です。山に続く道の入口に「正一位取手稲荷社」と石柱が立っています。

その近くに「取手館跡」の説明看板も置かれていました。義国が応援に駆け付けています。義国は平義国（大掾）のことで、竹原城の城主であった竹原四郎義国のことのようにです。府中城の本家大掾氏の大掾貞国の弟。四郎というので四男でしょう。そしてあちこちに城や館、砦、要害などを築きます。そんな状況を理解してやつと、この取手館の様子が覚えてきました。神社境内には明治44年4月1日建立の「鳥手神社三百五十年記念祭記念碑」がありました。

## 14、飯塚館

「取手山館」（田木谷巻）と関係の深い飯塚館跡を探して行ってきました。

当時、石岡（府中城）の大掾氏は江戸氏や佐竹氏の支援を受けた小川の園部氏と対立していた。

この両者の最前線基地が「取手（巻）山館」であった。この取手山には大掾氏の家臣たちが何人も入り防戦していたがこの最前線の砦が陥落すると手前の栗又四ヶ地区に城（屋敷）を構えていた家臣

たちはそれぞれの城に引いて戦った。

この栗又四ヶ(くりまたしか)村にはいくつかの城があった。殿塚館、笠松館は大掾清幹の近親で中郷城主を勤めた竹原左大臣兼信の家臣である栗又左近政清(十太基)が治めていた。

しかし、勢いに乗る佐竹勢の前にこれらの城は次々に陥落していった。もう一つ「飯塚館」があった。飯塚氏の名前は「耳守神社」で出て来る名前だ。第3代常陸大掾繁盛(金国香の直孫)の五男・五郎左衛門兼忠がこの飯塚の地に移り飯塚氏を名乗ったといわれている。

この飯塚氏の娘の千代姫の耳が治ったということで建てられたのが耳守神社で耳の病気に効力があると大変珍しい神社である。

それから500〜600年の間、この地は大掾氏の家臣として飯塚氏が守ってきたのです。

しかし、小川に小田氏側の園部氏が入り、大掾氏の弟が小田氏の防衛のために入った三村城が小田氏に落とされ、城主常春が自害して滅びるが、その小田氏も翌年には佐竹勢に出島の城(宍倉城、戸崎城など)を攻略され、土浦城まで陥落してしまふ。小川の園部氏も江戸・佐竹勢に組むせざるを得なくなり、大掾氏攻撃の先方としてこの取手山館で戦が続けられた。飯塚氏はこの小川と最も近い位置にあったため、自らの前線基地として取手山に砦を築いたものと考えられる。情勢が厳しくなると、他の大掾氏の部下たちはこの取手山に集結して戦ったと考えられる。府中城の陥落のことは歴史として石岡では取り上げられるが、これらの家臣たちが守ってきた城の様子はあまり語られない。たまにはこのようなところにも目の目を見させてやる事があってもよいのではないかと思っ

ている。

### 15、赤レンガの校門

小美玉市玉里地区の旧玉里総合文化センター(生涯学習センター)コスモス前にある古民家園の片隅に赤レンガの昔の小学校の校門が移築されて残されている。「新治郡田余尋常高等小学校」という比較的きれいな木の看板がかかっていた。大きな門ではないがこのような設備を保存することはとても大切なことだと思う。玉里村も当時は田余村だった。明治42年にできた学校だったそうだが、多分造られた時にこの校門もできたのだろう。

明治・大正の頃の赤レンガは美しい。関東大震災でその後のレンガ造りがほとんど禁止(ご)され、無くなってしまったのは残念に思う。

旧玉里小学校がまだ尋常高等小学校時代に使われていた門は昭和37年まで今の玉里総合支所(旧玉里村役場)があった場所に小学校があり、そこに置かれていました。小学校が移転した時にもこの門は役所の敷地に残されていたそうです。

### 16、玉里の古民家

生涯学習センター「こすもす」の前庭に古民家が移設、展示されています。

約230年前の1700年代に上玉里地区の小松家という民家として建てられ使われてきた物を、平成7〜8年に小松家から玉里村が寄贈を受けてここに移築したものです。特徴のある建物で、普通の曲屋と少し違い、曲り個所が2か所あります。

構造は曲り屋ですが、土間と馬屋の2つの曲りがあります。あまり多くの人が来るとは思われな

いのですが、それでも毎日のように管理人さんが来ておられるようです。中に入って、暖炉に当たりながら少しお話をさせていただきました。

### 17、館山(稲荷)神社

旧玉里村の生涯学習センター(玉里資料館)コスモスは高崎地区の裏山の高台にあります。この建物の裏に神社があります。館山神社です。

学習センターの裏手に回るとすぐに神社は見つかりました。赤い屋根が印象的です。拝殿の後ろには立派な本殿があります。

神社の入口は学習センターとは反対側で西側から登ってくるようです。上と下に2つの鳥居がありますが、急な階段があります。稲荷神社とはなっていますが、赤い鳥居がたくさんあるわけでもなくまたキツネさんも置かれていません。

この神社の創建は看板には応安元年(1368年)となっており、南北朝時代です。府中(石岡)では大掾詮国が今の石岡小学校の昔常陸国国衙があった場所に府中城を築いた20年後くらいになります。今の学習センターコスモスのある高台の地域一帯には「高崎館」があったようで、神社を最初に祀ったという「鶴町三河守照光」が治めていたといわれています。鶴町三河守照光は常陸大掾13代高幹(詮国の父)の一族というから、詮国とは当時どのような関係があったのだろうか興味はわきます。戦国末期にここも佐竹氏一派や小川の園部氏などにより攻め落とされたのだらうと思っ

今から50年前、労音と言う音楽運動に身を投じた頃のお話です。品川区の大企業に入社した頃、60年安保で団結力を身につけた労働者は、職場の隅々まで明るく諸要求を実現できる職場になっていました。諸々のサークル活動が盛んで、私も其の頃、先輩から誘われ労音の活動に…。

組合弱体化のため、新賃金制度（会社職制の強化）導入が計られ、組合の分裂策動が行われました。会社側の組合分裂策動により、人間関係や様々な愛憎を経験した私は、社会のあり方に興味を持ち始めました。そんな折、サークルの代表として、労音の地域活動に参加するようになりました。北海道函館労音との交流会に参加したのもこの頃で、生涯をかけて音楽運動に参加するきっかけにもなりました。

そして、何のために音楽運動を進めるのかの勉強が始まります！そんな時に字んだけテキストから…。

## 6 音楽と政治

### ・階級制のない音楽はない

ま先に、奈良時代の馬子唄が、貴族（くげ）の手に移り、外国音楽の影響を受けて、雅楽の「サイバラ」（催馬楽）になった話をした。奈良時代も、次の平安時代も、ともに、奴隸時代で、奴隸の所有者である貴族が社会を支配していた。

今でも、「なに兵衛、なに右衛門、なに左衛門」という名前がたまに残っているが、たいてい世襲です。それは、「右衛門、左衛門、右兵衛、左兵衛」という当時の官庁の名を尻にくっつけている。勤労人民の多くが官庁の奴隸だった時代の風習だろうと言っているひともある。なるほど、公家や皇族には、六兵衛だの七左衛門だのと言う名前はない。

い。

働いて社会を支えている勤労人民、それを奴隸として支配している貴族、それがこの時代の基本的な階級組織で、その階級支配は政治によって行われていた。奴隸の労働歌が、貴族の手に移って「サイバラ」という全く別の音楽になったが、奴隸はもう、その音楽を味わう事は出来ない。階級があり、政治があつたればこそ、こういう奇妙な事が起こった。「サイバラ」は、左兵衛や右衛門の長官の藤原氏その他の貴族の音楽で、奴隸の六兵衛や七右衛門の手の届かないものになった。

すべての日本人が、仲良く同じ多くの歌を歌い、仲良く同じ多くの歌を聞く。それが、日本の音楽を正しく発展させる基礎で、全ての勤労人民の要求です。そういう大多数の人民の要求や意志を踏みにじって、不自然に音楽を分裂させ、独占させることにしたのは、当時の階級制度、それを實現したものが政治です。当時の階級や政治を抜きにして、当時の音楽の問題を考えたら、歴史を無視した事になる。

すべての音楽がそうです。階級社会の音楽で、階級制を持たない音楽、政治の支配を受けない音楽、そんなものはあつた事もないし、今もありません。問題は、それに気が付いているか、どうかという事です。この階級対立が奴隸制度の基本矛盾で、また、根本矛盾でもある。

### ・封建時代の音楽

この矛盾から、奴隸制度の中に、新しい勢力が生まれ、貴族の支配する奴隸制度を倒して、新しい制度を打ち立てた。それが、封建制度で、鎌倉時代・室町時代・江戸時代と明治維新で資本主義

制度に移るまで70年近くも続いた。

封建制度の支配者は大土地所有者の武士階級です。農業の小経営者である農民から高い年貢（現物地代）を取り上げて、勤労人民の大部分を占める農民を支配した。これが封建制度の基本的な階級組織で、これは、ヨーロッパでも、アジアでも皆同じです。

こういう封建制度になって、音楽にも大きな変化が起こった。武士は、「平家物語」や「太平記」などの新しい「かたりもの」（叙事詩）、新しい「歌曲」（抒情詩、「能」や「狂言」などの、音楽を伴った新しい劇、それらを作り出した。農民は、また、「おんど」（音頭）や「さいもん」（祭文）その他の「かたりもの」（叙事詩、各地の非常に多くの「民謡」抒情詩、「かぐら」（神楽）その他の劇、それらを作った。特に重要なのは「民謡」で、今各地に残っている「民謡」は、だいたい、この時代に今のような形の根を持ったものが多い。そして、日本音楽のあらゆるメロディーをその中に集結して、後のあらゆる音楽を生み出す基礎をおいた。

それにも拘わらず、封建制度そのものが音楽の正しい発展を妨げる本質的な要素を持っていた。封建制は次の二つの特色を持ったもの。

#### ① 地方分権性

#### ② 厳しい身分層制

当時の日本人は、地方的には、藩による分権制によって、階級的には、士・農・工・商などの厳しい身分層制によって、其々切れ切れにされていた。それが、日本民族を近代民族として結集することを妨げ、したがって、日本音楽を民族音楽として結集し発展することを妨げる、根本的な条件だった事は、解り易い。



特に、音楽には、次のような、特別大きな打撃を与えた。世襲的な「家元制度」と言うものを生み出して、一方では、芸術家の地位を決めるのに、天分や能力によらないで、血の繋がりによるという、世界にも珍しいやり方をして、芸術の水準の高まる事を妨げ、一方では、流派の間の対立（セクト性）を激しくして、音楽の統一による発展を妨げました。それは、今でも、音楽だけでなく、能や歌舞伎や、色々な伝統芸術の世界に、大きな害毒を流している。マルクスも、日本封建制は典型的な封建制と言っているが、それはそういう点を指摘したものだ。言うまでもなく、こういう不幸な現象は、当時の階級組織から必然的に生まれたもの、当時の政治が必然的に生み出したものです。

#### ・封建制の危機

こういう矛盾が、奴隷制の中に、封建性そのものを掘り崩す、新しい勢力を生み出した。つまり、資本主義的要素で、町人はその代表的な層です。これが封建制を危機に陥れる根本の原因で、この層が新しい音楽を生み出した。各種の浄瑠璃、地唄（土唄）、長唄、歌舞伎、その他がそれです。

この場合、大事な事実があります。それは、これらの音楽は、外国から三味線という新しい楽器を輸入して、それを基礎に、発達させたものです。

当時の支配者たちは、外国との交通・貿易の発達、国内の資本主義要素を進展させ、封建制の危機を深めるものであること、したがって、音楽その他の文化に対する支配の基礎を掘り崩すものであることを、よく知っていた。そこで、対外的には、鎖国で、交通・貿易を固く禁止し、対内的には、益々封建的身分層の制度を厳しくし、一層

野蛮な弾圧政策で、支配を続けようと努力をした。こうして、資本主義要素もそれ以上発達できなくなり、音楽その他の文化の本質的な発展も止まってしまうた。

そのため、江戸時代の末になっても、未だ、音楽の、地方的な、また、身分層的な分裂、セクト性は、殆どそのまま残っていた。例えば、楽器が身分層によって区別させられる、世界でも珍しい現象が、日本音楽にあった。笙・箏は貴族の楽器、琵琶・箏は武士の楽器、三味線は町人の楽器というように、厳しく区別されて、公家や大名が三味線を弾いたり、町人や百姓が笙を吹いたり琵琶を弾いたり、決してしなかった。それは、法律で禁じられていたからです。

当時、「座」の制度というものが、芸術はこの「座」で縛られ、全ての音楽家が、どれかの「座」に属し、「座頭」（さがしら、ざとう）の支配を受けていた。「銀座」だとか「歌舞伎座」だとか、今も、その名は色々の形で残っています。

当時の日本音楽の正しい発展を防ぎ止めた根本の原因であるセクト性は、このように、当時の階級組織とそれによる政治が生み出したものです。

こういう矛盾が、内外からの圧迫を深めて、明治維新となり、日本封建制が崩れ落ちて、資本主義社会へ突き進むことになった。

#### 県指定文化財（20）

兼平智恵子

今年の恒例のいしおか雛巡りは二月十八日（三月三日）迄行われます。

JR石岡駅西口にある「市民文化伝承館」内にも展示される事になり、豪華な雛壇飾りが期待されます。この伝承館は昨年新石岡駅完成と共に完成し、石岡のおまつりで華やかさを誇る山車人形が一月余りの期間、交代で紹介されていました。現在展示されている山車人形は泉町の鐘馗さまです。以前にも当会報（ふるさと風九一）にて紹介しましたがちよつと復習してみます。

中島自転車様、渡辺薬局様辺りから泉橋を渡り、一里塚を越え葉のウエルシア辺りまでの旧水戸街道沿いに広がる町並みで、寛永年間（一六二四～一六四四）頃までに街道沿いに形成された町並みで「新宿（あらじゆく）」、「新町（あらまち）」と呼ばれていた。府中松平氏の支配下の宝永年間（一七〇四～一七二二）に「泉」と改称され、当時火災がしばしば起こったことから防火の願いを込めて水の源泉である「泉」町に改めたと言われている。

鐘馗さまは中国の唐の時代のお話に出てくる神で、疫鬼を退け魔を除くという巨眼、多髯、黒冠、をつけ、長靴を履き右手に剣を執り、小鬼をつかむという勇姿で江戸街道の入口（江戸へ向かう時は江戸街道、水戸に向かう時は水戸街道とも言われている）で石岡の北口で守りを強くしています。ちなみに水戸街道の入口は幸町になっており、南口では、幸町の武甕槌命さまが守りを固くし、水戸街道南口と北口で石岡の民の無病息災、国家安穩を願い守ってくれています。鐘馗さまは二月十日頃迄で見ることができると思いますが一度ゆっくり御覧なさってみては如何でしょうか。

以上、石岡市中心市街地のお知らせでした。

今回の県指定文化財は、八郷地区（石岡市の最北端、

恋瀬川の源である板敷山の麓にある浄土真宗本願寺派板敷山大覚寺にあります工芸品「弥陀名号」と書跡「妙法蓮華経」です。

○弥陀名号 有形（工芸品）

指定 昭和三三・三・一一

工芸品弥陀名号は寺伝によると、法然上人の書を親鸞聖人の第二夫人恵信尼が刺繍したものといわれ、親鸞聖人が越後に流罪になる時、形見として親鸞聖人に贈られたものと伝わっている。縦六四cm、横一六cm、で金糸で刺繍してある。

○妙法蓮華経 有形（書跡）

指定 昭和三三・三・一一

妙法蓮華経は長さ十m一cm、幅二六cm、六mの横巻物で紺紙に銀泥の罫線を施しその中に金泥をもつて楷書で経文が書かれている。巻首に阿弥陀如来を中心として諸仏を描いた浄土図があり、それから経文が書写されている。筆者は不明だが奈良朝初期の作と推定されている。

当寺は大覚が東北地方を教化しての帰途、承久三年（一二三二）に当地を選んで草庵を営み、阿弥陀如来を安置して「大覚阿弥陀堂」としたことに始まると伝えられている。この大覚とは第八二代後鳥羽天皇の第三子、正懐天皇が剃髪して親鸞聖人の高弟となり、名を周観大覚と改めた人物で、その後、元仁元年（一二三四）に「板敷山大覚寺」と改称された。板敷山は「親鸞聖人法難の地」として全国的にも知られている。

本堂左側の奥に素晴らしい庭園（石岡市指定文化財）を見ることができず。回遊式庭園の様式をとり京都にある「桂離宮」を模して造園したもので、

どの角度から見ても裏がなく「裏見無しの庭」と称され池の周囲では、松や紅葉や他の古木と自然石との調和が整い、梅、あやめ、睡蓮などが季節に応じた花の薫りを漂わせています。中でも珍しい四角形の竹は必見です。

それでは八郷地区にあります茨城県フラワーパークよりご案内します。こちらから車ですと十五分位で到着します。フラワーパーク駐車場より左折し北へ向かい八分位で宇治会交差点を左折、五分位走りますと大増丁字路を左折、国道六四号線走ること二分位で右側に板敷山を背にして小高い所で迎えてくれます。

※参考資料 石岡の歴史と文化 現地説明板

・山あいには梅ほころび本堂優しくみつめて 智恵子

## 足尾銅山

小林幸枝

足尾銅山に行ってきた。

日本屈指の鉱山として栄えた足尾銅山は、全長1234kmの坑道のうち、現在700mが公開されており、江戸時代から昭和にかけて採掘の様子が再現されています。総延長は1234km（およそ東京から博多間の距離）に達し、日本一の鉱山と呼ばれています。トロッコ列車に乗って坑内に入り、江戸時代の手掘りの様子から、機械化された現代の様子まで見ることが出来ます。

足尾銅山は、慶長15年（1610）に徳川幕府の御用銅山となり、明治時代には古河市兵衛が銅山を買収し、東洋一の生産量を誇るようになった。一時休止しながらも約400年もの間、同の採掘

が行われましたが、時代の流れとともに生産量が減少し、昭和48年に閉山しました。

通洞坑は、国指定史跡になっています。通洞坑を通って坑道内に入り、終点まで降りた。坑内を歩くとまるでタイムスリップしたかのような感じになります。薄暗い坑道には、各時代の採掘作業の様子が人形で再現されていた。

銅資料館と鑄銭座を見学。銭形平次でおなじみの銅銭ですが、随分大変な作業で銅銭を作っていたことを知りビックリ。

寛永通宝（一文銭）は江戸末期まで各地で造られていましたが、足尾で造られていた寛永通宝はすべて裏に「足」の字が刻まれ、「足字銭」と呼ばれています。

坑道の案内図を見ると、まるで蟻の巣のようになっていました。こうした場所も、一度は見えてみるべきだな、と思った。

どうなっていくのだろう

伊東ヨシ子

大型・広域ごみ処理場建設の話が出てきてから、あつというまに進んでいく様子に危機を感じていた。二十八年の議会にも質問が出た。その時、その時警鐘をならす積りで訴えた。反応は薄かったが、

「初めて知った。よかった」

「市民が知らない中に、そんな大きなお金が動くんだね」

「どうせ上の方の人達が進めてんでしょ」

「議員さんら、なんとかしてくれらるんでしょから」

と教える何人かの話しは耳に入ったが、それ以上深まっていかなかった。私もやけ糞的になって、

「今年は強く感じました。茨城という風土の中で長い歴史を重ねて育った県民性でしょうか。よいにつけ、あしきにつけ、事が起きて自分たちの問題とも考えず、行動も起こさない傾向があることを自分も含めて思います」と、又声を出してみたが、文字だけでは伝わらない、広がらない。行動に移さなければと、都会から戻って来た友と、高崎地区の人達と、

「ごみ焼却施設建設を考える会」に参加して勉強することにした。それは6月だった。

ところが突然、白雲荘解体の話が出てきた。8月24日霞台厚生施設組合の会議で、解体することを決定するという。こんなに簡単に決まってしまうのはなんだろう。ここで市民の声をあげようと署名活動に入った。お盆を目安に一ヶ月もない中で努力することになった。どんどん進んでいくのに一般市民は知らないでいる。これでいいのかと思ひ役所関係に問い合わせると、

「知らせてあります。白雲荘、ごみ処理場から三百メートル以内の住民に知らせ、二度の説明会と見学にも行っている」

とのこと。それに出席者は十名足らずということが分かった。大型・広域ごみ処理場を利用するのは一町三市の住民なのに、それに我が玉里地区には今までの三倍の車が通ることになる。ごみ捨て場となるのだ。腹が立つのは私だけではあるまいと問い合わせたが、冷静な声で「広報に載せて知らせてあります」と電話を切られてしまった。

署名に走り回った日の暑かったこと。忙しかったこと。でも知ってくれる人、応援してくれる人

に支えられて集まった時の喜びは大きかった。8月24日の霞台厚生施設組合の会合では、市民の気持を無視し、走り回った努力をもへし折られるような結果で終わった。1380名の署名は日の目を見ることもなく、会議に提出されないままという結果だった。

9月にコスモスで市主催ということで、説明会が開かれ、さすがに玉里地区の人の熱気を感じた。説明は霞台組合の事務方がカラー刷りの印刷物で、決定したかのような話で進められ、基本的なことよりも保障の問題、道路の話が優先し、基本的な何故大きい物が必要、何故人家の多い此処なのか、何故狭く高低差の多い場所なのか、公害のこと、減量の話が話されじまっていた。この時感じたのは、霞台組合の職員と市の職員、霞台組合の議員と市の議員の心の疎通や報告がなされていないのを感じた。

10月6日(木)には、白雲荘やごみ処理場の現場見学に参加した。「男池」の奥には、以前灰や他の色々なものを埋めて出来た台地があった。ここは特に調べるべき等の話が出た。合併以前の書類がないそうだ。説明、案内してくれた職員さんは、好意的に話しをしてくれたが、上司の命令には逆らえないことなど、はっきり言っていた。

10月には、各市町長との話し合いがもたれた。4人の長との兼ね合いもあるのか、どなたからも具体的な話しは得られなかった。特に地元の小美玉市長には、市民を守るべき立場で取り組んで欲しいと要望したが、それは望めないと感じた。

10月11日(火)、かすみがうら市の市長の立場で、遠くまでごみを運ぶ負担、費用の負担を市民はどう考えているのか確かめたかったが無理のよ

うだった。

10月28日(金)。石岡には参加できなかったが、市長になった3年前には既に決まっていたことなので、受け継いでいくということだ。

11月に入ると、12日に茨城町で、15日に小美玉市で、17日には石岡市で、19日にかすみから市で各地区毎の説明会が行われた。寒さにむかって、夜、遠い道程を行く交通の便もなく、年齢のこともあつて何処へも行かずじまっていた。これらは説明会ではなく、決定報告会だったので、うと一人思う。市長選もちらちら噂される中で、ご自分達の時に出来たという心情も満更嘘でもあるまいという人もいる。

ごみ処理場の埋めた所からの検査の結果もその後分かった。問題ある数量など出てきた。

有耶無耶にしていたことが、この半年で確認出来たし、真剣に取りくんている姿の人々を知った。「ごみ焼却施設建設を考える市民連絡会」の人達に感謝します。よく学習されていること、広範囲からの資料を紹介してくださったこと、私ら玉里地区がもつともつと勉強して、声を出して次の世代へ良い贈り物をしたいと、心あらたに決心した一月です。どうなるだろうかと心配なことばかり。

衣・買っては捨て、次の物を求め、実を飾っても直ぐに塵になる。

食・必要以上に飲み食いし、残り物は芥とする。住・使える住居、家族を分けても、新しい物を建てていく。やがて粗大ごみとなる。

それらは、ごみ処理場へ運ばれてくるのだろうか。こういう生活をしていって、人間一人一人は何を得ているのだろうか。どんな素晴らしい人格が備

わつていくのだろう。

韓国に住む娘の家族はいつも感心する。大きな一部屋の角に三つ部屋があり、何時も開け放しになっていて、五人の子供は出たり入ったりしている。娘は塵を丁寧に区分けしている。子供達にも確り区分けさせている。塵出しも旦那、息子は重い物、大きい物。下の子達もそれぞれに合わせて、アパートの塵置き場を持って行く。そこで管理している男の人と挨拶を交わしたり、話しをしている。日本の子達もお坊ちゃま、お嬢ちゃまではだめですよ。生活をすることを確り教えないと。遠い日の決して裕福ではなかったけれど、「幸せ」とは何かを教えてくれたあの頃のことから、これからの幸せに繋がる何かを見つけてみたいと思いついてみた。

台所、風呂の水はどぶ池に溜まり、野菜にかけたり、焼けた庭にまいた。小川から、がねやが来たり、蝙蝠やが来た。父の腰に下がっていた手拭は醬油で煮出したという言葉がびったりの色だった。生理用の綿はよく乾かして燃やした。塵と一緒に扱わなかった。子供の頃何気なく言っていた「おんぼろ、さんぼろ、わかめの行列」の意味は大人になって知った。季節ごとの草や庭の果物、山の実、流れの小魚をよく食べた。唯一の紙、新聞は果物の袋にし、その後便所において使った。汲み取りは父が、溜池に入れ、よく腐ると畑の肥やしとなった。母は米のとき汁を野菜にかけながら「おいしい牛乳よ」と。おぼは燃やした後消し炭をつくり灰は畑にまいた。もともと限りなくある。自然の物を食べ自然に戻っていた。今は違うと言えはそれまでだ。心ある方々が増えることを願うこれからもどうなるの、どう

しようと言いつけよう。

いまは地球の周りも、現代の塵でいっぱいなのだそう。阿弥陀さまも、さぞお嘆きであろう。

## 【風の談話室】

### 《特別寄稿》

#### 落ち穂拾い（4）

鈴木 健

#### 一 仙台の語源

現役時代のこと。出張で仙台駅に降り立った。時間があつたので、ぶらぶら仙台城の方へあるいていながら、仙台という地名のいわれに思いをめぐらせるが、どうにもわからない。その後ろからバスの気配。振り返って目に留まったのは「川内」と大きく行く先を表示したバスの頭。その瞬間、これだと気がついた。今にして思えば、これが私の地名始めだった。川の内側、川が大きく蛇行するその内側がカワウチそれに漢字をあてるとすれば川内、その川内を音読すれば、川は山川草木の川のようにセン。内はナイのほかに内裏籬（ダイリビナ、お内裏様など）のようにダイということ、センダイ。仙台はその川内が起源だ。うれしくなってチョンチョンバナをしながらゆくと、すぐに青葉城。その駐車場に多分私を追い越したあのバスであろう、1台がとまっていた。ここが川内だった。谷底には川が大きく蛇行している。「青葉城恋歌」はいまだ世に出ていないが、「広瀬川流るる水にあの人は帰らず。」の広瀬川。まさしくここが川内。くわしく知りたいと街に出て書店にはいると、これまた偶然か、出たばかりの『日

本地名辞典』が目に入ったので早速購入した。その川内の項にはつぎのように書かれていた。

「仙台の発祥は、慶長六年伊達政宗が岩出山から居城を仙台城、（山名により青葉城とも）に移したことにある。略—仙台城の地はもと国分氏の千代城址であつたといわれ、東は広瀬川に臨む六五メートルの断崖、南は竜の口と呼ぶ深さ五〇メートルの谷、西と北は山林に連なる標高一三三メートルの場所。略—地名の由来は古く城辺にあつた千体仏から「せんだい」千代、それを正宗が仙台と改めたという。本来アイヌ語センナイ（川の入り口）を語源とするか。現在城址付近に川内の地名が残る。」

あるいは、周辺に千代萩が群生していたからという語源説もあるがどれをとっても自信が感じられない。そこで、川内の兄弟地名を呼び集める。鹿児島県の川内市、ここは川の中流にあり、原発でも有名。徳島県徳島市には川内町〇〇と川内（カワウチ）町を冠にした町域が35。仙台市青葉区川内（カワウチ。福島県にも入水鍾乳洞を近くに持つ川内村。川に囲まれた高知市には古くは河内（カワウチ・カワチ・ユウチ、大阪の河内平野も同じではないか。人はまず地名に宛てられた漢字から語源を見当づけるが、それが当てはまることはまれだ。仙台の仙は千でたくさんあるという意味で、台は高殿・ウテナであるというが、それを紹介する人はいてもそれを主張する人はいない。

#### 二 多胡

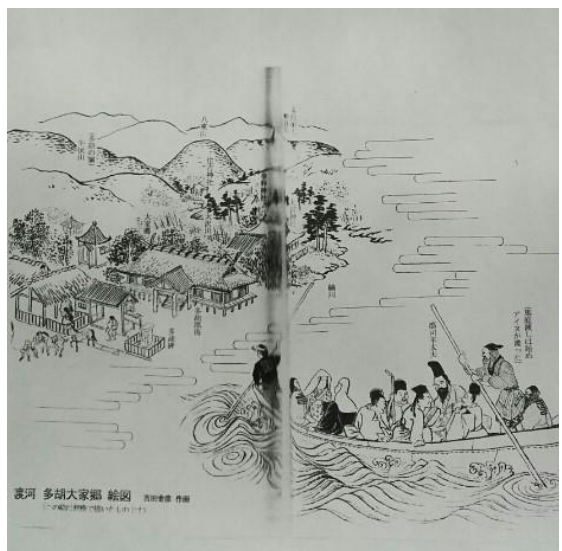
川にまつわる地名に東北最大の都市、仙台（センダイ）を見たが、その前身の川内（センダイ）が鹿児島県にもあり、より日常的なカワウチ・カワチ・

コウチ（川内・河内・高知）は各地にあった。いずれも中世あるいはそれ以後の命名であったろう。つぎに、漢字の意味も発音の意味も不明な地名、多胡・田子などの由来を検証してみよう。これは中部から東北に今でもかなり残っているが、成立が古いので、訛りも多い。

まず歴史的地名の多胡（現・高崎市吉井町多胡、この地のことは『続日本紀』の和銅4年（711年）の条に出てくる。それには、上野国の甘楽（カンラ）緑野（ミドリノ）、片岡の3郡から6郷を割いて新たに多胡郡を置いたと書かれている。その史実は、いわゆる「多胡碑」となって現存している。古く「毛の」国だった「毛野」の国の一つが大宝律令（701年）で「上野（コウツケン）」国となった。「多胡」は和銅のころから渡来人が多く住んでいたということから多（多）胡（エビス）と命名されたという。西暦6〜700年のころ、そのような文字が使われていたであろうか。やはり多胡という文字でなくタコという言葉の原点に考察すべきであろう。タコの語源を日本語に求めてもたどりつけないが、幸いなことにアイヌ語がある。異言語間の言語の移動は、両民族が大量に長期にわたり共同生活を送ることにより実現するが、近世にいたるまで両者にはそれがなかった。しかし、アイヌ語は縄文語の直系の後継語に置き換える、それによって日本語に引き継がれた縄文語を解読する。このような手続きによって、タコの語源の解明を期待するものである。

「多くはポコンと盛り上がったような円頂の独立丘であるが、尾根の先端が少しふくらんで盛り上がっているようなタブコブも少なくない。」と云う。あるいは、「東北北部では、達子とか田子と書いてタッコと呼んでいるところがよくある。」として、秋田県大館市近在の「美しい全くの丸山である。」達子森、岩手県葛巻町の「何とも美しい円頂上でアイヌ語でいうならここも正にタッコブ」の田子（タッコ）、秋田県北秋田郡達子森、福島市の「正にタブコブ型の山である」田子山などをあげている。茨城県高萩市にもやや削平された立子山がある。Tabkopの音節末は不破裂音(puでなくp)のため、聞き飛ばされてt(㊦)ㄱ(㊦)タコ（地形名・蛸・胼胝・風）となる。あるいはtankopに転じてタンコブ・テンコブ（㊦蜘蛛）、語尾のp音が消えてダンゴ・テンコモリ。前略でコブ（瘤・㊦蜘蛛・㊦くるぶし・おでこ・コブシ（握りこぶし）・花名・㊦丸くるぶし）・コマ（駒）・カブ（株・蕪・塊）・頭・㊦膝）・ガブ（南くるぶし）・カブリ（㊦頭）・カブラ（㊦頭、クブ（㊦首）・クモ（蜘蛛・入道）雲・クマ（㊦ふくらみ））となった。各地にある愛宕山の語源も、a（強いて訳さなくてもいいとされる、われらの（知里）ㄱ(㊦)ㄱ(㊦)でタコ・タンコブの山、京都のそれも頂上が頭のコブのようになっていいる。なお、「蛸」（漢語ショウ）の原義も蜘蛛のことで、多足や形状の類似から訓借したらしい。大詰めに来た。この地の子どもたちが「上州名物空つ風」を背に受けながら元気に「引つ張り風」を競っていたから多胡という地名ができたのであろうか。幸い、地名研究の第一人者吉田金彦氏著『草枕と旅の源流を求めて 万葉の多胡・田子の浦の歌』に先生の作画「鐺川渡河多胡大家郷絵図」があっ

たので転載させていただく。



図の中央上方に均整のとれた八束山、その左手に牛伏山（多胡の峰）、右に朝日岳（多胡美人）。いわゆる吉井三山とか多胡三山と称せられる山々であるが、主峰となる八束山だけが多胡を冠した通称がない。これはどうしたことか。実はこれこそ「離れてぼつんとたっている丸山、孤山、孤峰」。形の良い典型的なtankopタンコブ、テンコモリ、タコである。「多胡」の由来はこの山にあった。さらに勘ぐれば、その「八束（ヤツカ）山」という名も蛸の八本足＝八足の足（ツク）に通音の束（ツク）をあて、それを訓読みしたものと考えられる。愛宕のタゴも吉井のタコも、ともにtankopであった。静岡の田子浦にはいわゆる田子浦砂丘が顕著で、それは、「長大なわりには所々で切れている」（同書）という。上記tankopの定義（知里）①②のようなタンコブ状砂丘が連なっていたことが想像される。

西伊豆の田子港や福島の子倉ダムにはどう定義①にあてはまる孤峰がある。

なお、中部以北に「駒」のつく山名があり、駒(馬)の雪形が現れることが命名の由来と言われているが、北海道の馬の駒ヶ岳(山麓)、秋田駒ヶ岳(山腹)、馬の雪形の出ない甲斐駒ヶ岳(山頂付近)、積雪自体が少ない箱根の駒ヶ岳(山自体)には( )内の箇所が顕著なタンコブがある。それは、tatokop → taphkop → (p) → koma であろう。秋田駒の近くにある田沢湖に達子姫の伝説があり、同湖は田子潟とも呼ばれているという。この「タツコ」や「タコ」と秋田「駒」も無関係とは思われない。

### 《読者投稿》

#### 私の国府巡り 「続・国司列伝」

京都府精華町 今井 直

『続日本紀』(しよくにほんぎ)は『日本書紀』に続く勅撰史書で、文武天皇から桓武天皇まで九十五年間(697~791)の出来事が漢文編年体で記されている。朝賀や行幸、大赦、叙位など天皇の国事行為、謀叛を企てた政権抗争や官吏の異動など、奈良時代の歴史を知る上で非常に貴重な資料だ。そして万葉歌の背景を理解するのにも欠かせない。また、「日蝕があつた」「太白(金星)と辰星(木星)が異常接近した」などの記述は、度重なる凶作、天変地異、蔓延する疫病を恐れる人々の心の表れだろう。

天平十七年(745)、聖武天皇が遷都したばかりの紫香楽宮(滋賀県甲賀市)では、群発地震がその夏

ずっと続いた。『続日本紀』には、毎日のように「地震」とだけ記述されてそつけないが、五月二十五日の条には、「是月 地震異常 往々亀裂 水泉涌出」とある。「この月の地震の多発は異常で、あちこちで地面に亀裂が生じ、水が泉のごとく涌出した」というのだ。マグニチュードは分からなくとも、家屋の倒壊や死傷者の有無はどうなのか? 全般に記述が簡潔過ぎるのは、編纂されたのが平安初期であり、リアルタイムでなかったからだろう。

『続日本紀』は出来事の要点のみで、都より派遣された国司の実像などは詳細に及ばない。生身の人間としての人となりは、万葉歌の方がよく伝わるが、後世に歌を残す国司は極めて少ない。それで歴史に残された手がかりを拾い集めるのだが、私には楽しいひと時がここにある。

『続日本紀』天平十一年(739)三月二十八日の条で、「石上(いそのかみ)朝臣乙麻呂は、女官の久米連若売(くめのむらじわくめ)との姦通の罪により土佐国に配流され、若売は下総国に流された」とある。いつの世も男と女はどうにも仕様がなれないものだ。このスキヤンダルは、誰がチクつたか分からないが週刊文春のかぎつけるところとなり、大宮人の間で大騒ぎとなった。石上乙麻呂は家柄も申し分なく、丹波守を退任後は従四位下に叙せられ、いずれは橘諸兄政権の右腕とも目されていた。一方、若売は式部卿・藤原宇合の未亡人である。(後に桓武天皇擁立で活躍する藤原百川の母 宇合が天然痘に罹り薨去したのは一年半以上も前のことで、夫の喪服期間はすでに過ぎていたから、「姦通」は当たらない。セレブの美女とイケメンのカップルだから周囲の嫉妬によるものか、政界内部の争いに

よる冤罪かもしれない。若女は翌年に赦免されるが、乙麻呂は二年後の大赦で帰京したようだ。ほとぼりが冷めた天平十八年(746)には、驚くことに乙麻呂はかつて宇合も赴任した常陸守に任じられた。その後は順調に昇進し、最終官位は中納言従三位兼中務卿(なかつかさきょう)である。

乙麻呂の息子・石上宅嗣(やかつぐ)も実力を備えた政治家だった。相模守・三河守・上総守・大宰少弐と地方官を歴任し、天平宝字八年(764)に父と同じく常陸守に任じられている。その後、参議・大宰帥・式部卿・中納言の要職を経て、大納言正三位に昇りつめて死後に正二位を贈られた。しかし宅嗣は、当時から代表する知識人・文人というもう一つの顔を持ち合わせていた。大変な読書家で詩文や書にもすぐれ、唐から伝わった書籍をたくさん所蔵していた。自宅の片隅に芸亭(うんてい)と名付けた書庫を設け、好学の人々に自由に閲覧させたという。日本最初の公開図書館だ。芸亭は奈良市立一条高校の辺りにあつたとされ、高校東側の国道24号線・法華寺東の交差点角に、「芸亭伝承地」の碑が建てられている。

文武天皇四年(700)十月十五日の条に、「直廣參百濟王遠寶為常陸守」と書かれた珍しい文字を見つけた。現代語訳で読み直すと、「直広参(じきこうさん)は正五位下に相当する当時の官位、「百濟王遠宝」は人名で「くだらのこにきしえんぼう」と読み、常陸守に任じられたとのこと。「百濟」だから渡来系の人物だろうが、「王」を「こにきし」と読むとは!? 私はフリガナを見てハワイ出身の力士と間違えた。あの大関も帰化人だが関係ない。「百濟」でふと思ひ出したのが、大阪府枚方(ひらかた)市にある百濟寺という廃寺跡だ。枚方は淀川

流域にあり下流は難波津へ、さかのぼれば木津川・宇治川・鴨川・桂川につながる。淀川の水が入り込みあちこちに平らな潟があったことから、「平潟」↓「枚方」が地名の由来らしい。江戸時代には三十石船による水運により大いに栄えた宿場町だ。京都と大阪の中間点だから、ベッドタウンとして多くの人口を抱え、京阪電車が通勤通学の足となつている。百済寺跡は私立高に隣接していたが、当時は松林と雑草が生い茂る荒地の印象しかなかった。今や史跡公園として整備されていると聞き、半世紀ぶりに廃寺を見学に出かけた。

古代の枚方は渡来系氏族と深い関わりがある場所である。古くから倭国（日本）は、鉄資源をめぐり朝鮮半島の百済国と友好関係にあった。七世紀中頃、百済は新羅と唐の連合軍に攻められ、倭国に救援を求めたが滅ぼされてしまう。折しも最後の百済国王の二人の王子が倭国に滞在していた。兄の豊璋（ほうしょう）は百済の復興を期して帰国するが、『万葉集』巻一に「軍王」と称する人物の歌が二首収録されている。「軍王」は「こにきしのおおきみ」と読み、豊璋の別名とする説がある。中大兄皇子は四万二千人もの援軍を派遣するが、白村江の戦いで大敗し百済復興の夢は消えた。すると百済の難民たちが倭国に亡命してきた。彼らは農耕や土木技術に長けており、養蚕・機織り・武器製作など先進の技術を持っていた。この点で現代の中東の難民と異なる。だから朝廷は積極的に彼らを受け入れ、居住地を与えたのである。その難民キャンプのひとつが枚方であった。

豊璋の弟である禪広（ぜんこう）は帰国が叶わず、倭国に亡命を願う出る。やがて帰化して持統天皇

から百済王という新しい姓（かばね）を与えられ、朝廷に仕えることとなった。その後一族は、朝廷の重要なポストに就き、文化の発展にも大きく寄与した。初代の常陸守に任じられた百済王遠宝は禪広の孫であった。左衛士督（大内裏を警備する長官）を経て、天平六年（784）卒。最終官位は従四位下であった。

遠宝の甥・百済王敬福（きょうふく）は、天平二十一年（749）、陸奥守在任時に黄金を献上したことで知られる。当時、聖武天皇が悲願とする東大寺大仏の造立が進められていた。鑄造完了を目前にして仕上げの塗装に使う黄金がなく、天皇は心を痛めていた。そんな折、陸奥国小田郡（仙台から北へ十幾里）で純度の高い良質の砂金が発見され、陸奥守敬福から九百両（約十四貫）の黄金が貢進された。わが国で黄金を産出したのは、この時が初めてだった。聖武天皇が狂喜したのは言うまでもない。天下に大赦の詔を出し、官人すべての位階を昇進させた。一番の功労者である敬福は、従五位上から従三位へと七階級特進した。渡来系貴族としては最高の官位である。産金を記念して元号も改められ、西暦七四九年はわが国では、天平二十一年・天平感宝元年・天平勝宝元年と、三つの元号を持つ珍しい年となった。

聖武天皇は大仏の前に出御し、黄金産出の報告と大伴家をはじめ臣下をねぎらう宣命を、中務卿・石上乙麻呂に述べさせた。この時、越中守だった大伴家持は心遣いに感謝し、天皇の御代を寿ぐ歌を詠んだ。長歌は一〇七句に及び『万葉集』で三番目の長編で、信時潔が曲をつけ、先の大戦中に広く知られた「海ゆかば」は、その長歌から採った一部である。

海行かば 水漬く屍 山行かば草むす屍  
大君の 辺にこそ死なめ かへり見はせじ  
（反歌）

すめるぎの 御代御代栄えむと 東なる

みちのく山に 黄金くがね 花咲く

（巻十八四〇九四、四〇九七）

ところが、高さがおよそ十五メートルある廬舎那仏坐像の表面積から計算すると、献上された九百両の黄金では鍍金するのに四分の一にも満たないそう。おそらく完成した当時は、大仏のお顔だけが金色に燦然と輝いていたらしい。大仏殿は幾度も焼失と再建が繰り返され、廬舎那仏も大部分が後世に補修されている。現在の大仏は江戸中期に修復されたもので、金メッキでなくとも充分美しいブロンズ像だ。

大仏に金メッキを施すのに金アマルガムを使用したと云う。水銀は他の金属との合金を作りやすい性質があり、金と水銀を一对三で粘土状の合金にして仏像に塗り、炭火で加熱して水銀を蒸発させ金だけを残す方法だ。「メッキ」と片仮名で表記されるが外来語ではなく、「滅金」からきた和製漢語である。大仏造立という大プロジェクトを成し遂げながら、三十年後には平城京を見捨てなければならなかった理由の一つに、環境問題を指摘する説がある。鑄造過程での銅による土壌汚染・水質汚濁、立ち上る蒸気に含まれる水銀による環境破壊だという。

念願が叶って安堵されたのか、聖武天皇は病に臥しがちになり、娘の阿倍内親王（孝謙天皇）に皇位を譲られた。男性では生前退位された最初である。聖武太上天皇は、天平勝宝四年（752）に行われた念願の開眼供養を見届けてまもなく崩御さ

れた。

大仏開眼の法要が営まれてすぐ、敬福は常陸守に転任した。時に五十五歳。その後は出雲守・伊予守・讃岐守などを歴任しているが、詳細は不明である。もしかすると任地に赴かない遙任だったのかもしれない。むしろ参議・橘奈良麻呂(左大臣・橘諸兄の嫡子)や太政大臣・藤原仲麻呂(左大臣・藤原武智麻呂の次男)が反乱を起こしたときに、乱を鎮圧し反乱軍の勾留警備の任に当たると、軍事面での活躍が目立つ。

天平神護二年(766)六月の条に、従三位・刑部卿の百済王敬福の薨伝が記されている。それには、「放縦不拘 頗好酒色」、つまり小さなことに拘らないおおらかな性格で、すこぶる酒色を好むとある。また、清貧の人に頼られると気前よく散財したので、実入りの多い国司を務めながら、家には余財はなかったらしい。豪放磊落で物分りの良い豪傑肌の人物であったようだ。

また、「聖武皇帝殊加寵遇 賞賜優厚」の記述も見られ、聖武天皇には特に寵愛され、恩賞や賜わりものが多かったようだ。敬福は従三位に叙せられた翌年、宮内卿兼河内守に任ぜられている。河内国は、聖武天皇が行幸した知識寺で廬舎那仏を拝し、大仏を造立する発願の契機となった地である。敬福は河内国交野(かたの)郡(現在の枚方市)に広大な土地を与えられ、百済王氏一族が移り住むこととなった。

百済寺は、敬福が百済王氏の氏寺として建立したと伝えられるが、七堂伽藍の完成は平安初期と考えられている。一町半(約百六十町)四方の寺域に、南大門・中門・金堂・講堂・食堂が一直線上に並び、金堂の前には西塔と東塔が置かれ、奈良・

西ノ京の薬師寺に似た伽藍配置である。両塔跡の礎石は、心礎の他の礎石にもホゾ(柱を固定するための突起)を施した精巧な造りだ。主要建造物の基壇もまた良好な状態で現存し、往時の伽藍の様子や朝鮮半島との関係を知る上で極めて重要な史跡となっている。百済寺跡は史跡のなかでも学術上の価値が特に高いとされ、昭和二十七年(1952)に常陸国分二寺跡・讃岐国分寺跡などと共に、最初の特別史跡に指定された。現在、特別史跡は全国で六十一件あるが、大阪府内では大阪城と二件だけである。

さらに渡来人は、祖国の七夕伝説も交野の地に語り伝えた。枚方には天の川・かささぎ橋・星田・牽牛石・機物(はたもの)神社など七夕にまつわる名所が点在し、「天空の地上絵」と呼ばれる。『万葉集』には、七夕の歌が約百三十首もあり、しっかりと日本に根付いた文化だ。高松塚・キトラ両古墳(奈良明日香村)の星宿図(天体図)にも驚嘆する。『続日本紀』は、天平八年(736)三月二十八日の条で、「金星が月に入り、他の星は光を増した」と記している。人々が夜空を仰いだのは、不安に駆られてだけでなく、遠く瞬く星空にロマンを求めていたのかもしれない。

(参考文献)『続日本紀』講談社学術文庫

枚方市 観光文化生涯学習課 HP

伊藤博著 『万葉集釋注』 集英社

## やさし暮らし(1)

徒然里女

・何処に行こうか

息子夫婦が1年ぶりにやって来た。我が家は、

互いに干渉しない事になっている。元気でいればそれで良い。会った時に其々、日ごろの暮らしぶりを語る。

最近、山の仲間が出来、年末には東京で最高峰の雲取山(2017m)に登ったはなしが。夫も高校時代、山岳部だったので話が弾んでいた。

お嫁さんは、東南アジア(台湾・タイ・ベトナム等)が大好きで、特に台湾へは年に数回行くと話していた。明日4日からはタイに行くという。夫も何度か行った事があるので、話が弾む。

私はひたすら食事の用意を。お皿の中が奇麗になつていくのが嬉しかった。  
今日はこれから揃って初詣に。笠間か…、何処になるのか。

・早くも花粉症?

息子夫婦と、三が日恒例の初詣に笠間稲荷へ行く。参拝(家族の健康と世の中の平和を願う)を済ませ、参道の出店を散策。食事処を探したが見つからず、家に帰る。帰宅した途端、息子はクシャミと鼻水で、辛そう。涙で目も腫れている。裏山を見ると杉の樹が黄色く花粉を付けている。

ここところ風も吹いており、八郷に来た時からクシャミの連発。食事もティッシュを抱えていた。息子も私と一緒に、重度の花粉症。また嫌な季節が来た、と言いながら東京へ帰った。  
居なくなるとホツとするが、寂しくもある。

・春を発見

冬は何処へ? まるで春のような暖かい日が続いている。庭をブラブラと散策。足元に何やら…。

「あれッ」と思い、枯葉を手で払う。ウツワ



「フキノトウが顔を出している。さらに枯葉を払っていく。小さなフキノトウの蕾が彼方此方に。『早いな』この暖かさが続くと福寿草までも芽が…。

暖かいのは嬉しい。でも冬は寒くないと…。今日辺りから普通の寒さに戻るとか。本格的な冬將軍の到来を、Tで告げていた。最近大きめの地震が頻繁に。昨夜も大きな揺れが2回、怖いですね。

・縁起物かな。

昔、蒲田にいた時、掛け軸に凝っていた。近所に表装をする知人がいて、よく覗きに行った。

ちよūdその頃、夫がベトナム旅行で、鳥の絵を土産に持って帰って来た。風水で、鳥は幸運を招き縁起が良い、と聞いたので掛け軸に出来ないかを相談。知人は快く引き受けてくれ、現代風の掛け軸を作ってくれた。

絵の周りの布は母の着物を解いたもの。今年は酉年。改めて当時のことなどを思い出した。

・これも縁起がいい…？

これも蒲田時代。いつとき習い事に凝り、くる日もくる日も、仕事に行く振りをして稽古に通った。その一つが写経。無心に筆をもって276文字(般若心経)。その日の気持が字に現われる。根気のない生徒たちに、先生が「舞鶴」と行書で書いたものをプレゼントに頂く。お手本では勿体なく、知人に表装を頼んだ。

・縁起の続き。

15年前、蒲田から八郷に居を移す事になり写経

の先生に挨拶を。先生は記念に文字を書くというが、希望の字がなかなか思い浮かばない。すると、先生は「無」と「道」の二文字を色紙に書いてくれた。

無は、何も無いところから無限の可能性を模索しなさい。そして道は、筆で書くとき書の基本が全て入っている。(はね、伸ばしなど)「新しい土地で、確りと大地に足をつけ、頑張れば必ずと道も開ける」と、餞の言葉をくれた。

既に先生は個人となっているが、残された二つの文字は、私に大きな力を与えてくれた。今年はこの二枚の色紙を力にして、新しい道が開けるよう、過ごしていこうと思う。

・久し振りにのんびりと。

何の予定もなく、寒さもほどよく、歩いていると汗ばんでくる。コロちゃんトラブラ散歩。ご近所のお馴染みさんと世間話。色々な情報を教えてくれ、植木の手入れも教えて貰う。ご近所さんはあり難いと思うこの頃。

午前中「ひつじの郷」の高橋さんが遊びに。茶飲み話を楽しむ。

我が家の庭にミモザの蕾が膨らみ始める。何とものどかな昼下りか。

・お茶がおいしい。

毎年ネット(アマゾン)で岩手の切り炭を買っている。ひつじの郷のオーナー高橋さんから、八郷でも炭を焼いている人が居ると聞き、早速二袋取り寄せて貰う。お正月はこの炭(囲炉裏)で炊きをし、部屋中が良い匂いに包まれる。

先日、高橋さんが遊びに来た時、追加で二袋お

願いする。翌日届けてくれた。なんとアマゾンよりも、遥かに早い。これでこの冬は越せるかも。囲炉裏での炭火は、毎日大活躍。お鍋や煮物と。炭火で沸かす鉄瓶のお湯は柔らかい。お茶やコーヒーに最高。明日も穴部かなあ。

養生日記

堀江実穂

某月某日。

私はとてもものぐさな人間である。一人暮らしなのだから、まあいいやと思つているところがあり、ものぐさがますます酷くなっていくようである。

レンジでチンするご飯を温めて、茶碗に移し替えることもせず、プラスチック容器のまま納豆をかけて食べてしまう。

寝る時に寝巻に着替えないで、次の日の作業に着ていく洋服を着て寝るのだ。そして朝起きるとそのまま作業所に行くのだ。

買い物も自分では行かずに、ヘルパーさんを買ってきてもらっている。たまに時間があるときはお店を見たり何が売っているのかを見た方が良くと言われているのだが、作業時から戻るとよほどのことがない限り外に出ることはない。手紙を出すのさえヘルパーさんにお願ひしてしまう。

某月某日。

私は、ちよūdと何か気に入らない事や面白くない事を言われてしまうと、直ぐに苛立ってしまう。それでメールで「死ぬ」だとか「殺す」とかを書

いて送ってしまう。

気持ちが落ち着いた時、反省し、誤りのメールや電話をしようとするが着信拒否などで連絡が取れなくなってしまう。

実際には、本当に死んでほしいだとか、殺してしまいたいなどと思っているわけではないのだが、感情が直ぐに沸騰してしまい抑制が効かなくなってしまうのだ。

私の周辺がドンドン狭くなってしまい、そのうち自分の身の置き場にも困ってしまうのではないだろうか。

### 《風の呟き》

風と戯れて

木下明男

・落日

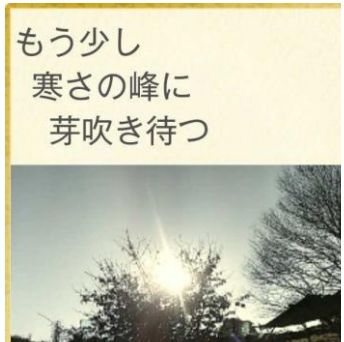
あまりの寒さに手をかざして



・あと少し

寒さも今がやま

もう少し待てば木々に芽吹きが



・春の兆し

歩いていると道端に咲く花 春間近



### 『月』のルーツ

菅原茂美

【1月号19頁、風の呟き「矢状稜」の筆者名が記載洩れ。矢状稜の消失は、人類進化史上、最重要の大変革であるゆえ、菅原が心血を注いで書いたものです。熟読いただければ幸甚。】

文学的には、ロマンチックに映る「月」も、準物理学的には、過酷な経過を辿って誕生した。

そもそも宇宙は、今から138億年前、ビッグバン

によって誕生。時間・空間・物質とも全くの「無」の一点から、「物質」と「反物質\*1」が、ほぼ等量でこの宇宙は誕生した。そして1500億個の銀河が生まれ、我が天の川銀河には、2000億個の恒星が存在する。その一つ太陽系に8個の惑星が生まれ、第3惑星地球には、分不相応の巨大衛星「月」が生まれた。そして更に生命が誕生した。

【\*1反物質とは、核子の陽子がマイナスで、電子はプラスの電気を帯びる。従って物質と反物質が衝突すれば一閃の光を放ち、すべて消失。例えば物質からなるA子と反物質からなるB男がキスした瞬間に両者は光となってこの世から消えていく。こんな乱世に長生きするより、それも心地よい昇天か。なお、今この宇宙が物質からなる理由は、宇宙創成の時、物質の方が反物質よりわずかに多かったからと言われる。しかし現在の宇宙は、68.3%の暗黒エネルギーと26.85%の暗黒物質と、僅か4.9%の物質からなる。要するに宇宙の95%は何も分らず、分かっているのは5%のみ。】

さて宇宙は誕生以来、膨張を続け現在もハッブルの法則に基づき遠くの銀河ほどより早く、この地球から遠ざかっている。それを逆算すれば宇宙誕生の時期や場所などが推測できる。とはいえ、我が天の川銀河のすぐお隣さん（230万光年）のアンドロメダ銀河は、何の気まぐれか、猛烈な勢いでわが天の川銀河に急接近している。両者が23億年後、合体すれば、何が何して何とやら…。太陽は宇宙誕生から92億年後、即ち今から46億年前、先代の恒星が老化爆死し、宇宙空間に散った塵埃が、再び少しずつ集まり、中心が重力を増すと、益々物質を吸収し、遂に原始太陽の誕生

となる。太陽は渦巻きの天の川銀河中心から50光年離れたオリオン腕に存在し、太陽系全質量の99.86%を占める。なお、原始太陽の内部では水素同士の熱核融合で燦然と輝きだす。しかし太陽はあと50億年で寿命が尽きる。輪廻転生を感じる。

次は地球の誕生だが太陽系間物質の外周部で、軽い元素からなる木星や土星など四つのガス惑星が生まれた後、46億年前、重い元素からなる四つの「岩石惑星」として誕生する。地球の位置は太陽から1.5億km（1天文単位、太陽から光が約8分かかる）。この距離は水が3態（個体・液体・気体）をなし、生命誕生の大きな要因となる。

さて月の誕生であるが、当初、原始地球は、小惑星や隕石などの重爆撃で、マグマオーシャンの火球状態。その火球である地球に、火星と木星の中間に存在する「小惑星帯」から「テイア」と呼ばれる小惑星（水星くらいの大さき）が地球に斜めに衝突してきた。これを、ジャイアント・インパクト（GI）という。その為、地球はかなり破壊し、地軸は公転軌道に対しほぼ23度傾き、四季が生じた。GIにより月が誕生したという証拠は、アポロなどが持ち帰った月の岩石分析により立証された。月の表面には地球と同じ玄武岩や、放射性同位元素含有率など地球の岩石と同じである。更に正確なGIの時期は、放射性炭素年代測定法により、約45億年前と確定した。地球が誕生した直後である。GIの他に月の成因として、兄弟説、分裂説、捕捉説などあるが、いずれも、GIほどの説得力のある成因はない。

さて、GIにより地球の地殻は勿論、マントルまでもが宇宙に飛び出したが、ティアの本体破片と短時間で併合し、地球の周辺を回る「衛星・月」

誕生。勿論、新生の月も火の玉で、当初地球からわずか2万km（現在は38万km）。地球の1日は5時間。1年は400日（現在の24時間×365日の4分の1）。水も空気もなし。月の重力干渉で、地球のマグマオーシャン潮汐高は、何と1000cmもあつた。そして月自身は、今なお地球から離れようとしており、毎年3.8cmずつ遠ざかっている。

【月のデータ・漢字の「月」は三日月の形状から生まれた象形文字である。衛星としての大きさは太陽系第5位で、赤道半径3,474km。1位は木星のガニメデ5,262km。2位は土星のタイタン5,150kmである。小規模の地球から見れば、月の大きさは、並外れて大きい。それゆえ地球に対する影響力は巨大である。質量は地球の81分の1。表面積は地球の1/4。標高の最高点は平均月面に対し10,750m。最低点はマイナス9,060m。ともに月の裏側なので地球からは見えない。赤道面の昼の月面温度は110℃。同夜間はマイナス170℃。月面の明暗により、その周期は29.5日で、「太陰暦」として長く用いられ、動植物の生理に大きく影響。日本では明治5年から太陽暦を採用。】

### 竹橋暴動

### 打田昇三

明治維新で二百数十年間に及ぶ藩制時代が終りを告げ、明治四年七月十四日には「廃藩置県」により二百七十余の藩が消滅して多くの武士が職を失い収入を絶たれた。徳川幕府から明治政府に政権が移ったのだが、公務員として再就職出来た武士は薩摩藩・長州藩などに限られたと思う。

明治新政府は「庶民の不安」に「武士の不満」

「薩長藩閥への不信」を抱えて船出したらしい。それに加えて国庫財源確保の為に地租改正などで税を重くしたため、地主階層、富裕農民層などにも「政策への不満」が生じてきたのである。

明治十年以後になると西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通など維新の功臣が相次いで世を去り、右大臣・三条実美が率いる内閣が日本国を治めることになったのだが先立つものは「資金」である。当時、薩摩・長州藩を主体とする政府は、会津を中心とした奥羽列藩を攻撃して一五〇万石の利益を得ていた。異論は有ったが此の中の百万石を国防軍費として、残りの五十万石を「明治維新の功臣に対する報奨金」に充てる予定で有った。

ところが其れを審議する御前会議では百万石が報奨金とされ、軍費が五十万石に減らされてしまった。明治天皇は老臣と言う爺いらの主張に何も言うことが出来なかつたのである。日本国の転換期である筈の明治維新も、結局は国家・国民の為では無く、程度の低い権力闘争の果てであつたことを証明する結果になってしまった。

そうした中で明治十年に起きた西南戦争に代表される様に「佐賀の乱」「熊本の乱」「萩の乱」など各地で反政府暴動が起り、明治十一年には事も有るうに天皇を護衛する任務の精鋭部隊で皇居近辺に駐屯する近衛砲兵隊の数百名が反乱を起す「竹橋暴動事件」が発生している。

決起の趣旨は「君側の奸を除き、天皇に直訴しよう」とするものであるが、具体的には「百万石報奨金」の様に西南戦争後の論功行賞に対する中・下層級軍人の不平不満が有つたと思われる。何時の時代でも功績の顕彰は組織の下層部末端まで及ばないから其の様な事件が起きるのだが。

此の事件の時に部隊付の岡本柳之助と言う少佐が居た。夕方に帰宅していた所へ「反乱を企てる者有り」との密告情報を得たのだが内容が分からない。部隊に急行して自分の指揮下に居る下士官らを探したけれども所在不明な者が多い。止む無く営舎に残って居た兵士全員を呼び集め「駆け足行軍！」の命令を下して外へ連れ出し、一部の者だが暴動への参加を止めさせたのである。

其の直後に事件が発生し、数百名の軍人が武装蜂起して当直士官らを殺害、兵営内の秣(まぐさ)小屋に火を付けた。反乱軍は天皇に嘆願する計画で有ったが情報が漏れて戦闘となり、出動した鎮圧軍と警官隊によって全員が捕らえられた。

暴動発生の際緯からすれば単なる暴徒集団では無いにもかかわらず「皇居に押し掛けようとした不忠者」として重罪が課せられた。首謀者五十三名が銃殺刑、残る二百何名かは流罪などの過酷な刑罰を科せられたのである。上官の命令に従っただけの兵士も「反逆者」にされてしまった。

此の時に暴動参加者を止めた岡本少佐も、反乱の一味と思われ官職剥奪などの重い処分を受けたと言う。此の事件を契機に日本国は「大日本帝国」として「忠君愛国」が強制される「軍人の国」になったのであろうか…。

## 【特別企画】

### 打田昇三の私本・平家物語

巻五 (二一・二)

五節之沙汰(こせつのかた)のこと

第二次世界大戦の最中には「勝つて来るぞと勇ましく…」という自分勝手な歌詞の軍歌が歌われたりしたが、多分、関東に出撃して行った平家軍も「勝つて来る」つもりで富士川まで来たのに、下手な一人相撲のような意味の分らない負け方をしてしまった。何もしないで勝利者になった源氏軍の先遣隊が富士川沿いに展開していた平家の陣営跡を偵察して「全員が(無事に)逃げました」という報告をした。平家軍は慌てて逃げたので、当然だが忘れ物もあり、捨てていった物もあり、周辺はバーゲンセールの場合が大地震に襲われたように品物が散乱していた。それを源氏の軍兵たちが「折角だから…」と頂戴したのだが、中には平家軍が張っていた大天幕を取った者が居て使うことが出来ず何の役にも立たなかった。

総大将・源頼朝の許には「敵陣には蠅一匹も飛んで居ません…」という報告が来たので、頼朝は馬から下りて兜を脱ぎ手を洗い口を漱(すす)いでから、遥か都の方を拝礼して「これ(平家軍撃退)は全く頼朝個人の手柄にあらず、源氏が信仰する八幡大菩薩の御加護である」と祈った。やがて平家撃退の功名として駿河国を一条次郎忠頼に預け、遠江(とうとうみ)国を安田三郎義定に預けて自分は相模国へ帰って行った。補足しておく一条忠頼は後に頼朝に妬まれ殺害されるのだが甲斐源氏の若きリーダーとして囑望された人物であり、義定は忠頼の叔父である。有名な武田信玄からだとは頼朝は十数代前の祖先になる。合戦の定法からすれば勝った源氏は、直ぐにも退却する平家軍を追撃すべきであり、頼朝は都まで追いかけるつもりでいたのだが、千葉、上総、三浦などの重臣が止めた。理由は常陸国の佐竹一族が平家

に付いていたためである。他にも頼朝に味方してくれる武将たちの範囲も勢力も完全には把握できていない現状での追撃は危険と判断され頼朝は富士川から相模国に戻った。

この合戦で、当てが狂ったのは地元で営業していた「遊女屋」である。折角、来てくれた平家の客は一晚で逃げ帰り、勝った源氏の客は祝杯も挙げずに引き挙げてしまった。そこで憂き晴らしに「何と呆れたことよ。源氏を討とうとして攻めて来た大將軍が矢の一筋も放たずに都へ逃げ上る情け無さ、戦さには見逃(敵前逃亡)が軽蔑されるけれども、このたびは聞き逃(敵前逃亡)をした！」と笑い合った。戦争も悪いが、営業妨害も良くない。

同様の趣旨で、負けた平家を皮肉の落書き(落首)も多く、都の大將軍・宗盛、討手の大將軍の官職である権亮(このすけ)に平家を「ひらや」と読み替えて詠んだ二首

「ひらやなる宗盛(棟洩り) いかにも騒ぐらん柱とたのむすけ(支柱)を落として」

「富士川の瀬々の岩越す水よりも早くも落つる伊勢平氏(瓶子)かな」(伊勢平氏 卷一参照)

また参謀長の上総守忠清が富士川合戦で鎧を捨てて逃げたことを詠んだ二首

「富士川に鎧は捨てつ墨染の衣(ころも) ただ着よ(忠通) 後の世のため」

「ただきよは逃げ(二毛) 白黒(三毛)の馬にぞ乗りにける上総しりがい(馬具) 上総産を上物とした 掛けてかひなし」 私見だが「ただきよは 只、気弱」「かひなし」甲州勢に負けた」を言っているような気もする。庶民の皮肉は鋭い。いずれにしても平家軍は富士川で完敗したのである。

治承四年十一月八日(五日説もある)、大將軍・権亮

少将維盛率いる…(と、言えるかどうか疑問はあるが)平家軍は福原の都に辿り着いた。当然のことに入道相国清盛は怒りまくって「大將軍・権亮少将を鬼界が島に流し、侍大将・上総守忠清を死罪にせよ！」と命じた。巻第二で俊寛ら三名が流されたのも鬼界が島である。命令は受けたが仲間うちを処罰するので気が引けた平家の重臣たちは翌日に緊急会議を開いて、忠清の処分について討議を始めた。是も異例のことで、平家内で大親分・清盛の権威が弱り始めた証拠である。

会議の席で清盛の腹心であり平家一族の大番頭に当る主馬判官守国(しゅめのはんがんもりにく)に「現代だと運輸関係の高級官僚で司法警察職員を兼ねる」が忠清を弁護して次の様に言った。

「忠清は昔から臆病者であると言う噂を聞いたことが無い。彼が十八歳のときだと思いが、鳥羽殿(城南の離宮)の寶藏に畿内(京都近辺諸国)一と言われる悪党二人が逃げ込み立て籠った事件では、誰も逮捕に近寄れなかったところ忠清が白昼堂々と一人で中に入り込んで賊の一人を討ち、一人は生け捕りにしてきた。その様な忠清であるから今回の敗戦には何か特別の事情が有ったと思われる(実際は無策であったけなのだが)是につけても(平家としては)兵乱鎮定の為の御祈祷が大事であろうと思われる…」

武将とは思われないような守国の発言であるが平家も「東国戦場の負け」を認めない訳にはいかないから、懲罰問題はうやむやになった。そして十日には驚くことに戦場に行つて戻つて来ただけの大將軍・権亮少将維盛が右近衛の中將に昇進したのである。是を聞いた庶民は「源氏討手の大将とは聞いたが、何の手柄も無かったという人物がどうい理由で昇進するので有ろうか？」と平家特有の不可解な

人事に感心した。

其の昔、平将門を追討する為に平將軍貞盛(平国香の子・桓武平氏の祖)と田原藤太秀郷(たわらとうたひでさ)とが討伐の命令を受けて坂東へ出陣したけれども、容易に追討する事が出来ず、重ねて討手を下すように閣議が行われて宇治民部卿藤原忠文(藤原宇合の子孫)に藤原重藤を付けて関東へ向かわせた。一行が駿河国の清見が関(現在の興津海岸)に宿営した夜、重藤が海を望見して「漁舟火影寒焼浪・駅路鈴声夜過山(ぎよしゅうのひのかけさむくしてなみやき、えきろのすずのこえよるやまをすぐる)」という漢詩を高らかに口ずさんだ。是を聞いた忠文はガラにもなくセンチメンタルな感情に襲われて感激した。

其のうちに貞盛と秀郷は将門を討ち、証拠品の「首」を持つて都へ登る途中で、藤原忠文らの援軍と行き会い、一緒に都へ戻つて来た。貞盛と秀郷は褒美を貰えたのだが、途中まで行つただけの忠文たちに対する処遇が問題になった。当時の右大臣であった九条殿こと藤原師資(ふじわらのもろすけ)は「出陣したのであるから、褒美は与えるべきであろう」と主張し、是に対して摂政・関白の小野宮殿(藤原実頼)は「疑わしきことをば成すなかれ」と中国の古書に書かれてゐるから、と言つて褒美は与えなかった。忠文は是を恨み、恐ろしいことだが「小野宮の子孫は奴隷のように使用人になるように、九条殿の末は何時までも栄えるように、私が守護神になる！」と誓つて自ら食を絶ち飢え死にした。(馬鹿なことと思つて…)其の為に、九条殿の子孫は繁栄し、小野宮には是と言つた子孫も居らず絶え果ててしまった。朝廷という権力構造に寄生していた藤原氏のことなどどうでも良いのだが、原本に有るから紹介した。

話を平家に戻して、其の中に入道相国清盛の五男

である重衡(しげひら)が近衛の中將に任官した…と原本にあるが、是も史実とは違ふらしい。

源氏の出現と平家の負け始めとで平家物語の作者も頭が混乱している様子がうかがえる。治承四年十一月十三日には福原の内裏が完成して安徳天皇が移られた。その前の十月末には即位後最初の新嘗祭(いなまきい)が行われた。此の儀式では天皇が賀茂川の河原で禊(みそぎ)身を清める行事を行わなければならない。当時の十月は現在の十一月である。乳幼児の域を出ない坊やが寒空に丸裸で賀茂川に漬けられた。安徳天皇は五年後に平家一族と共に壇ノ浦に沈められるから、その予習だと思えば諦めもつくが気の毒な話である。

慣例では更に内裏の北に齋場を設けて神様に供える道具類を飾り、大極殿の前の「龍尾道」と名付けられた石の廊下の下に廻龍殿という浴室が造られ天皇はそこで入浴してから神を拝礼し、その後で公家たちが馬鹿騒ぎの宴を張るのだが、福原には大極殿なども無かったから儀式も宴会も行われずに天皇が神に備える新米の試食だけをしたのである。平家の所為でそうだったので、面白くない公家たちは、わざわざ京都に行つて普通りの行事をしたようである。平家の威光にも影がさす。

そもそも、新嘗祭など五節の行事は、第四十代・天武天皇の時代に吉野の宮に於いて風の強い名月の夜に、天皇が心を澄ませて琴を演奏した際に天女が袖を五度、翻して舞い降りた、という故事?に因むものとして此の章段は終わる。

都 帰(みやこがえり)のこと

平家に対して不満を持つ公家などが、思わず万歳を三唱したで有ろうと想像できるような章段である。書き出しは「今度の都遷（みやこうり）をば君も臣も御嘆きあり。山（比叡山延暦寺）・奈良（興福寺）をばはじめて（初めとして）、諸寺・諸社に至るまで、然るべからざるよし、一同に訴え申すあいだ、さしも横紙をやらるる（破る）太政入道（清盛）も、さらば都帰りあるべし、とて京中犇（ひし）めきあえり」となっている。

勝手な推測ではあるが、平清盛以外に誰一人として満足しなかつた遷都である。或いは清盛自身も心中では「失敗した！」と思っていたかも知れない。治承四年十一月二十六日（平家物語では十二月二日になっている）急に帰京が実行された。

新都であつた福原は北に山を負い南は海が迫っているので常に波の音が喧（やかま）しく、潮風が吹き付けるので、先ず高倉上皇がノイローゼになつてサッサと逃げ出した。是に従つて摂政の藤原基通や大臣以下の高級公務員が先を争うように京都へ戻つて来た。無責任な平家の者たちも犯人同様なのに、被害者の様な顔をして福原を捨てた。誰が好んで此の様な場所に居るものか：と口には出さないが清盛以外は思つていた。

先見の明と言うか、目先の利く者は半年も前から「京都帰還」を予測して、不動産の売却や引越センターの手配を行つていたけれども、時流が読めない者は、逆に京都から福原に移り住む覚悟を決めて、それを実行しようとしたところ、福原が見限られたために途方に暮れた。そういう者たちは住む家を無くし、辛うじて都の郊外である八幡、賀茂、嵯峨、太秦（うづまさ）、西山、東山などにある神社・寺院などに身を寄せる有り様であつた。

そもそも平家が京都から福原に都を遷した本当の理由は何か？と言えば、京都は奈良や比叡山に近いため、其処に屯（たむろ）する僧兵たちが些細なことで春日神社の御神体（神木）や日枝神社の神輿を振り回して不法行為をする。福原は山川や入江で遮られているから其の様な心配が無いと清盛入道が思いついて計画したのであると人々は噂をしていた。つまりは無駄な事をした、と言う批判である。しかも福原から戻つた平家は其の様な事を心配している暇が無い状況に追い込まれている。富士川の合戦から逃げ帰つたまま、近畿地方に起こる「反平家勢力の対応」に追われているが、東国では既に平家は見放されている。

その年の十二月二十三日、近江源氏と呼ばれた山本、柏木、錦織などの地方武士が平家に対して「反抗します」と言つて来た。平家は大將軍として清盛の四男・左兵衛督知盛を任命し副將軍には関東遠征と同じ薩摩守忠度が充てられた。今度は戦場も近いし、相手も源氏の傍流であるから知名度も低い。集めた兵力が頼朝の場合のように多くは無い。それでも平家軍は二万という大軍勢を用意した。近江国と言えば京都の隣県でもあるし比叡山には僧兵も居る。平家にしてみれば冗談でも負ける訳にはいかない合戦である。平家物語の作者はスポンサー大事と「あぶれ（半端）源氏ども一々に皆、攻め落とし、やがて美濃・尾張へ越え（進撃）給う」と景気良くヨイシヨしているけれども、実は三井寺園城寺をはじめ僧兵軍団が近江源氏と通じ合つていたのである。平家は地盤である西国でも人氣が急落していたのに未だ其れに気が付かず、反乱者の武力鎮圧に専念する。

奈良炎上（ならえんじょう）のこと

此の章段をもつて巻第五が終わるので少し長くなるが「奈良炎上」は穏やかでない。「文明」の定義からすると「文字の発明」「政府の組織」「冶金術の開始」が不可欠であるらしいが日本の場合には支配者が大陸から逃げて来たので、都合の悪いことは「神話」で誤魔化していたため国家の成り立ちが曖昧になっている。奈良時代に大寶律令を作り、和同開珎（銭）を造り、元明天皇が奈良に宮殿を置き、嘘でも古事記を残したから、文明の条件が整つた。言うなれば「日本国」は奈良から始まつたのであるから、其処を燃やしてしまつては国家として元も子もないことになる。

近江国の反乱が大騒ぎをした割には簡単に収まつたけれども、平家にしてみれば奈良の僧兵たちの動向が気になる。市場で平家株が暴落しているのに「株式会社平家証券」を営業しているようなもので、誰が言い出したのか「高倉宮（以仁王）が平家に抵抗した際には、南都（奈良）の僧兵たちが味方をし、その上、宮を匿つたりした。是は明らかに朝敵である（本当は平家の敵になつただけであるが）此の上は奈良（興福寺）も三井寺も攻めるべきである」とする意見が出て来た。是は関東に出て行つて富士川から逃げ帰つてきた大失敗を何とかして取り返したい：という焦りが平家に有つたからであろう。

この辺の情報を抑えた奈良の僧兵たちも負けてはいない。「平家打倒」の氣勢を挙げて両陣営は一触即発の状態になつた。時の摂政・藤原基通が心配して、僧兵たちに「不満の事があれば私から後白河法皇に申し上げるから、此処は穩便にするように：」申し入れたけれども聞いて貰えない。

政府は太政官の弁官（大臣・参議に次ぐ高官）である藤原忠成を使者として派遣し説得に当たらせなければ、僧兵たちは弁官も弁当屋も区別がつかないから「二やつ」を乗物から引き摺り出して髪の毛を切り落とせ！」と息巻いたので忠成は慌てて逃げ帰った。次に將軍に相当する衛門府の高官（武官）を派遣したのだが、是も坊主頭にされ掛かって逃げて来た。此の時はお供をしていた二人の家来が犠牲になつて理髪店に行かなかつた。

奈良の僧兵たちは毬杖（ぎつちよう杖で毬を打ち合う競技の玉を大きめに作つて「平相国の頭」と名付け、それを「打て！」「踏め！」などと囀（はざ）し立てていた。「言葉の洩らし易きは禍（わざわい）を招く媒（なかだち）なり。言葉の慎まざるは破れをとる道なり」と古書に有る。

この入道相国と申す方は、口に出して言うのも畏れ多い、現在の天皇（安徳天皇）の外祖父である。それをこの様に賤（いや）しめて言う奈良の僧兵たちは天魔に魅入られたとしか思えない。

奈良に於ける僧兵たちの言動は平清盛の許に伝わるから「今に見ている！」と思つていたのである。何を置いても奈良の狼藉（無礼な振る舞い）を鎮めようと、清盛は腹心の瀬尾太郎兼康（巻一の「殿下乗合」に登場）を大和国（奈良県）の檢非違使庁（警察本部）に配置した。兼康は早速、五百余騎を率いて奈良へ向かつた。多分、清盛の指示だと思つて兼康は「衆徒（僧兵）たちは乱暴狼藉をすると思うが、我々は抵抗するな。完全武装はするな。弓矢は持つて行け！」と命じた。是は僧兵たちを徴発し、単なる暴徒として制圧する為の苦肉の作戦であるが敵は知らない。調子づいて兼康の陣に乱入し、六十人ほどを捕え、その首を斬つて興福寺大門前の池の周りに掛け並べた。

知らせを聞いた入道相国は味方の犠牲が予想外に多かつたことに激怒して「南都を攻撃せよ！」と命じた。大將軍として、前章段で中将に任官したときされる平重衡（清盛の五男）が任命され、副將軍には中宮亮通盛（ちゆうぐうのすけみちもり）清盛の弟・教盛の子、中宮亮は皇后付の高官が充てられた。与えられた兵力は四万余騎、源氏拳兵に対応して東国へ派遣した軍勢の数よりも一万ほど多い。この辺りの清盛の感情に左右される危機対応が平家の弱点に思える。

是を迎え討つ奈良の僧兵軍団は、年齢制限を撤廃して掻き集めた動きの鈍い後期高齢者を合わせても七千余しか居らず「兜の緒を締め」と原本にあるが、何処の紐を締めても人数は増えない。

奈良街道へ通じる坂と般若寺の前と二か所の道筋に堀を掘つて防御陣地を築き、楯を並べ、材木を汲んで障害物とした。平家軍は注文通り二か所の防御陣地に分かれて押し寄せてくれたが、馬に乗つて攻めて来るから速度が速いし、馬力が有る。

速攻連射で射掛けて来るから防御する僧兵たちの犠牲が多くなる。朝食の時間から押し寄せて飽きずに夕方まで攻撃して来るから護る僧兵軍団は犠牲者が増えるばかりである。夜に入って遂に二か所の拠点に敵に破られた。僧兵軍団は逃げるか討死するか隠れるかしか無い。落ちて行く僧兵の中に勇猛で知られた坂四郎永覚という者がいた。

武器を持つても弓矢でも力の強さでも奈良の七大寺、或いは十五大寺で一番の武勇を誇つていた。

其の日は萌黄色で編んだ腹巻の上に黒い鎧を重ね五枚の垂れを付けた飾りの無い兜の緒を締めて、左右の手に反りの深い大長刀と黒い柄の太刀を持ち、仲間十余人と東大寺の大仏殿西北に在る門から打つて出た。是により多くの平家軍が馬の脚を斬られた

り、討たれたりした。しかし、兵力が格段に多い平家軍が入れ替わり立ち替わり向かつてくるので永覚の仲間も討たれてしまった。一人で残つた永覚は後方が無防備になつたので、已む無く南を指して落ちて行つた。

合戦が夜まで続き暗くなつたので大將軍の頭中將が般若寺の門前に立つて「火を掛ける！」と命令をした。是に従つて平家軍の中から播磨国の住人で福井庄の下級役人・二郎大夫友方が付け木の代わりに持つていた木製の楯を割つて松明（たいまつ）にしてから、酷いことに近くの民家に火を付けた。折しも十二月二十八日の夜で寒風が吹き荒れていたから、火元は一か所でも直ぐに燃え移つて多くの民家や寺院が焼けてしまった。この場面について解説書の中には「夜戦の為に灯りに使つた火が民家に燃え移つた」としているものもあるが、原本に「松明にして在家に火をかけ」とあるから放火であつて失火ではない。

抵抗していた僧兵たちは、恥を思い名を惜しむ者が、或いは奈良坂で討死し、或いは般若寺で倒れた。傷を負つても歩行が出来る者は吉野方面や十津川方面に落ちて行き、自力で逃れることの出来ない老僧や、武芸を知らない僧、未成年の見習い修行僧、女性、子供たちは大仏殿の二階や興福寺の中へ逃げ込んだ。大仏殿の二階には千余人が登つた」と原本に書いてあるが、大仏様の高さが東京タワーぐらい無いと千人は無理であろう。

平家軍は避難者の中に敵兵が潜むことを恐れて橋を落したりして妨害した。猛火は情け容赦なく迫つてくる。人々の泣き叫ぶ声は都に響き渡りその様は焦熱地獄の火炎に焼かれる罪人も、是には過ぎ無いと思われる残酷さであつた。興福寺は淡海公・藤

原不比等が奈良遷都に当り氏寺の山階寺を移した藤原氏累代の寺院である。東に在る金堂には仏法伝来の時に新羅国から贈られた日本最初の釈迦像があり、西の金堂は光明皇后が建立し内部に尾張の国から堀り出された観世音が置かれていた。四面の廊下には瑠璃（るり＝ラビスラズリ）を飾り、二階の廊下は赤やオレンジ色で鮮やかに塗られていた。東金堂と南円堂の塔は飾りを付けた立派な物で有ったけれども、それらの建造物が忽ちのうちに焼かれてしまったのが惜しい。

東大寺に置かれた仏像は常在不滅、実報寂光の身の御仏（天台思想による真理を象徴した仏）と言われて、聖武天皇が手ずから磨かれたとされる金銅製十六丈（古代インドで人間の身長を八尺として、仏像はその二倍の一丈六尺に造られたが大仏は、その十倍に見なして十六丈とした盧遮那仏（びるしゃなぶつ＝輝き渡る仏・光明遍照）である。その姿は烏瑟（うしつ＝仏像頭頂のまげ）が高く現れて中空の雲に隠れ（嘘！）白毫（びやくこう＝仏像の眉間にある巻毛を人々が拝した御尊顔も髪の部分焼けて落ちて地上に在り身体の部分は火災の熱で溶け出している。仏の相好（そうこう＝表情）は八万四千あると言われているけれども、それも名月にかかる暗雲の様な五逆罪（父母を殺す、仏体を傷付けるなどの大罪）に依つては、仏像も菩薩修行の「行・住・回向」を象徴する瓔珞（ようらく＝仏像の頭部と身体に付ける飾り）の輝きを失い、十の悪業（殺生・偷盗・邪淫・妄語・両舌・悪口・綺語・貪欲・瞋恚「しんに＝恨み・怒り」・邪見）の犠牲となる。

平家軍が放った火は見る見るうちに広がって火炎が天を焦がし見るに堪えない惨状となったのである。此の事件を聞いた人々は気絶する程に驚いたが、焼けたものは元に返らない。この暴挙により興福寺に伝わる法相宗（西遊記）で有名な三蔵法師が学んで伝えた仏

教）と三論宗（中国の統一以前、五胡十六国時代の高僧・鳩摩什羅＝くまじゅうら及び高麗の僧・惠灌が伝えた仏教）の貴重な経典などが一卷残らず灰になった。このことは我が国は言うに及ばず、インドや中国でも無い仏教界の法難・悲劇（損失）である。

その昔、インドの王が釈迦を忍んで香木で仏像を造り、帝釈天の家来である毘須羯磨（びしゅかつま）が梅檀の木で彫刻した仏像は、いずれも等身大のものである。それなのに此の度の戦火に焼かれたのは人間世界では最大唯一、無双の大仏である。どの様な時代でも壊れることは無いと思われていたのに今、俗世の毒（と、原本にかいてあるが、正確に言う和平家の暴挙である）によってそれを失ってしまった。さぞや、諸仏（梵天、帝釈天、持国天、增長天、廣目天、多聞天）も龍神八部衆も閻魔王以下の恐れ神仏たちも驚き呆れておられるであろう。増してや藤原氏の氏寺であった興福寺（法相宗）を護る春日大明神は尚更である。その為には春日野の露も色が変わり、三笠山の風の音は恨みを込めるように聞こえていた。

合戦の傷では無く火災が原因で亡くなった人数は大仏殿の二階に一七〇〇余人、興福寺では八百余人、名は不明な堂に五百人、別な堂に三百余人とされていて、詳細な記録では合計して三千五百余の犠牲者が出たことになっている。合戦の戦死者（主に僧兵で有ろうと思うが）は千余人居た。

僧兵の首は蘇我氏が創建したと伝えられる真言律宗・般若寺の門前に掛けられ、首謀者と思われる何名かの首は平家が都へ持ち帰った。

十二月二十九日、頭中将・平重衡は敵というより奈良の都そのものを滅ぼして京都へ凱旋した。喜んだのは入道相国平清盛だけである。個人的な鬱憤を晴らして上機嫌で有ったけれども、娘の建礼門院（徳

子、後白河法皇、高倉上皇から摂政以下の諸大臣・公家などは誰もが「手向かった僧兵を滅ぼすのは分かるが、貴重な寺院まで破壊させる馬鹿があるか！」と嘆き、心中で呆れ返った。

平家軍が持ち帰った敵の首も、誠の朝敵ならば獄舎の前に晒されるのだが、東大寺や興福寺が滅亡してしまつたことを一大事と捕え朝廷は何の指示も出さなかった。平家軍も他人の首を抱えていても御利益が無いし、生モノでもあるので始末に困り、辺りの堀や川や溝に捨てて回った。原本には書いてないが、京都近辺の空き地や川や沼などは恨めしそうな僧兵の首で埋まつたと思われる。

かつて聖武天皇は東大寺の額（銅版製）に「我が寺が興福すれば天下も興福し、吾が寺が衰微すれば天下も衰微するであろう」と書かれた。それに従えば、此の度の奈良滅亡（東大寺・興福寺の焼失滅亡）により、天下が衰微することは疑いの無いことになる。是は考えても恐ろしいことであり、人々が不安におののきながら、言うも恐ろしい年が暮れて治承も五年になったのである。

是で巻五は終り、巻六は高倉上皇の死から始まつて木曾義仲の挙兵、平清盛の死と出生の謎に話が進んで行く。鎌倉に腰を据えた源頼朝は未だ出てこない。巻七に入っても頑張っているのは木曾義仲であり、負けず嫌いな頼朝には不満である。

（巻第五終り）

編集事務局

〒315-0001

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>